

つくりあげていること

質の高い文化芸術創造環境の整備

質の高い文化芸術活動は、区民の創造性を刺激し、人々の生活や環境、ひいては都市の姿に革新をもたらす原動力となります。創作活動のための環境を整備し、その牽引力となるアーティストを支援し、多様な文化活動を展開することにより、豊島区の文化芸術の全体的な質の向上と活性化を図ります。その取り組みを紹介します。

にしすがも創造舎

廃校がアートファクトリーに生まれ変わった先駆的存在

にしすがも創造舎は、2001(平成13)年に閉校した豊島区立朝日中学校の校舎や体育館をそのまま残し、04(平成16)年8月にオープンしたアートファクトリーです。豊島区文化芸術創造支援事業の一環として、「アートネットワーク・ジャパン(ANJ)」と「芸術家と子どもたち」の2つのNPO法人が協働で管理運営しながら、子ども向けワークショップや読み聞かせ、地域の人々とアーティストによるプロジェクトなどを行っています。また、教室や体育館は慢性的な稽古場不足に悩む演劇・ダンスカンパニーが継続的に専有できる稽古場として貸出し、体育館は劇場としても使



にしすがも創造舎

〔所在地〕豊島区西巣鴨
4-9-1

〔施設概要〕稽古場、撮影スペース、作業部屋、フレイルーム、ワークショップルーム、カモ・カフェ、サロン、舞台芸術アーカイフ、体育館

〔利用時間〕10時～22時(カモ・カフェ、舞台芸術アーカイフ以外)

〔休館日〕毎月第4水曜日・
年末年始

われています。

廃校転用の先進事例として、また、文化芸術における行政とNPOとの協働という面でも、その取り組みは全国から注目を集め続けています。

オープンまでの道のり

旧朝日中学校は、閉校後、私立高校に約2年間有償で貸し出され、その後の利用については決定していませんでした。一方、ANJと「芸術家と子どもたち」の2つのNPO法人は、2002(平成14)年春から

2年間にわたって豊島区の旧千川小で地域の人たちに向けたアートプログラムを実施していました。
(※1)。

2003(平成15)年9月、豊島区は、地域活動団体やNPOなど地域社会と関わる多様な主体との協働を推進するため、協働事業提案の受付を開始します。そこでANJと芸術家と子どもたちが提案書を提出しました。東京の演劇状況において、稽古場不足を課題と捉えていたANJは、廃校(または区内遊休施設)を利用した稽古場運営事業および創造・発信を担う芸術環境づくりを、芸術家と子どもたちは子どもたちが気軽にアートに触れたり、ワークショップができるチルドレンズミュージアム事業を実施するという内容でした。これが協働推進委員会の審査を通り、同年4月に新設



親子のための「ギロンと探偵のいる2年1組」ワークショップ「みんなでつくろう大きな木」

※1

当時、豊島区生涯学習課学校開放係が管轄し、地域で利用者協議会が組織され、地域に開放されていた。2つのNPOは「アーツセンター千川」という名称で協議会に登録。「アート夏まつり」や、ワークショップ等、地域との交流を積極的に行っていた。

「にしすがも創造舎」ロゴ
アートレクシヨム
FLA T R O O M



にしすがも創造舎
NISHI-SUGAMO ARTS FACTORY

された文化デザイン課が実現化に向けて動き出すこととなります。文化デザイン課では、豊島区文化政策懇話会からの提言、「質の高い芸術創造環境の整備」をふまえ、「豊島区文化芸術創造支援事業」を推進することを決定、両NPOと、旧朝日中を拠点にどういった事業展開ができるか協議するとともに、地元の町会や商店街、住民への説明を重ね、理解を得ていきました。

2004(平成16)年8月、豊島区とNPO2団体は、「文化芸術創造支援事業(旧朝日中学校)実施協定」および土地・建物の使用貸借契約を締結。「にじすかも創造舎」がオープンしました。区は、消防設備保守のほか施設の存続に係る非常の場合の修繕費等を負担し、NPOは、光熱費、水道費、人件費、警備委託ほか、施設運営に係る経費を負担するというスキームとなっています。区は文化政策の一環となる創造環境づくりや文化芸術拠点を整備するという方向に沿った運営をしてもらうことを協定書に盛り込み、つねに区とNPOが話し合いながら事業展開していくという連携が実現しました。

地域再生計画の認定により活動が拡充

2000年代前半、六本木や汐留など、都心を中心として大規模なプロジェクトが次々と具体化し、都市間競争が激化するなか、豊島区では池袋をはじめJR5駅の乗降客が減少するなど、繁華街としてのまちの魅力が低下してきていました。また、コミュニティ意識の希薄化も問題となっていました。そこで区は、区内に点在する文化資源を活用し、新たな創造活動へ結びつけながら、魅

NPO法人アートネット
ワーク・ジャパン

2000年設立。「芸術の社会的な力の回復」と芸術と社会をつなぐ」という理念のもと、芸術文化の活性化および国際文化交流の促進に取り組み、「フレス・テイル／トーキョー」の開催、「にじすかも創造舎」の企画・運営、アートプロジェクト「としまアートのション構想」の展開など、さまざまな芸術文化に関わるプロジェクトを立ち上げている。

NPO法人

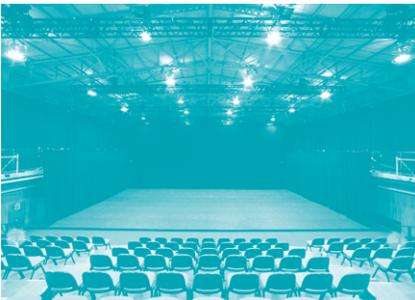
芸術家と子どもたち

1999年発足、01年NPO法人化。現代アーティストと子どもたちが出会う「場づくり」に取り組んでいる。にじすかも創造舎を拠点として地域住民参加型の活動である「ACTION!」、現代アーティストが学校や保育園等に出かけていってワー

力と価値を兼ね備えた活力ある「文化芸術創造都市」を築くことを目指し、地域再生計画「文化芸術創造都市の形成」を策定、2004(平成16)年12月に最初の内閣総理大臣認定を受けることとなりました。これにより、「補助金で整備された公立学校の廃校校舎等の弾力化の活用」が認められ、転用に伴う国庫補助金の返納が不要になりました。

地域再生計画は、必要に応じて支援措置の追加を順次行うことができ、それを活用し、豊島区は文化の担い手・推進者等の人材育成を行う「文化芸術による創造のまち支援事業」と「地域再生に資するNPO等の活動支援」を盛り込んだ「文化芸術創造都市の形成」としまアートキャンバス」計画」を認定申請。2005(平成17)年7月、地域再生法に基づく内閣総理大臣認定を受け、にしすがも創造舎では、読み聞かせ実践講座、稽古場体験講座、子どもと向き合う大人向けのワークショップやシンポジウムの開催、さまざまなアーツプログラムによって多世代・新旧住民がアートを媒介に交流する場づくりなどを積極的に実施しています。

2006(平成18)年3月、豊島区は地域再生計画のさらなる支援措置追加を申請し、それによりANJは、日本政策投資銀行の低利融資を受けられることになり^{※2}、体育館の改修が実現。防音のための屋根の補強や、客席を組むためのしつらえなど、劇場として使用するための改修が行われ、東京国際芸術祭(現・フェスティバル・トーキョー^{※3})の



クシヨップ型体験事業を実施する「ASIAS」、子どもたちが主役のオリジナル舞台作品を創作し発表公演を行う「パフォーマンスキッズ・トーキョー」などの事業を行っている。

※2

日本政策投資銀行と、地元金融機関、単独信用金庫が協調融資するものだったが、条件として単年度の契約期間を長期にすることが求められ文化デザイン課が庁内の調整を行った。

会場として使用が可能になりました。

地域密着型プロジェクトで地元とのつながりを

学校跡施設は区民にとって大切な場所です。その場所を文化発信という目的のためにNPOが運営主体となって活動していることを区民に知ってもらい、それが区の文化政策にとって有効なことだと理解してもらうことはとても重要です。そのための地域との関係づくりは課題でした。

旧朝日中学校がある場所は、戦前、大都映画の巣鴨撮影所がありました。2004(平成16)年、その大都映画で活躍したアクション・ヒーローであり映画監督でもあった「ハヤフサ・ヒデト」(本名・広瀬数夫 1904〜91)の足跡を、現代美術家・岩井成昭さんが地元の小学生とともに「ハヤフサ調査団」を結成してたどり、映像作品にまとめるプロジェクトを行いました。

映像作品とともにハヤフサの無声映画を上映したときは、ハヤフサを知る80歳前後の人を中心に500人もの人がにじみながらも創造舎に詰めかけました。地域の記憶が掘り起こされたと同時に、にじみながらも創造舎が多くの人に認知されるきっかけともなったプロジェクトでした。

その後も地域とともに取り組む企画が次々と実施されています。



子どものいるまちかど

「検証すかも愛くハヤフサ・ヒデトをさがして」上映会

※3
東京国際芸術祭(TIF)
1988年に「東京国際演劇祭88池袋」として始まり、02年に「東京国際芸術祭」に改称。国際的視野に立ったプログラムを展開する舞台芸術のフェスティバルとして08年の第14回まで継続した。

フェスティバル/トーキョー(F/T)での、海外の先鋭的なカンパニーの招へい公演と、子どもとアートが出会うような地域向けのプロジェクトが切り離されたものではなく、同じ場所で共存している。これにしますが創造舎の特徴であり強みであるといえます。

今後のビジョン

これまでの経験を踏まえ、今後、にしながらも創造舎は次のようなビジョンでプロジェクトを展開していきます。ひとつは、地域との結びつきをよりいっそう強くしていくということ。「グリグリ・プロジェクト」や「カモ・カフェ」はまさにそうしたコンセプトで運営していますが、今後は多様な世代に向けたもの、世代間交流の促進などを視野に入れ、地域文化を育むプロジェクトを積極的に行っていきます。

また「アートファクトリー」として、単なるスペースの提供に留まらず、さらに発展的な運営を目指していきます。たとえば、2012(平成24)年から始まった「オープンファクトリー」や「ファクトリートーク」は、アーティストがその創作活動の過程や成果をさまざまな方法やメディアで発信する試みであり、稽古場利用者が稽古期間中にワークショップや稽古場公開などを実施できるような環境も整え、創造現場での総合的なサポートを充実させていきます。

そして、活動の連携・発展につながるよう、近隣の区・県にある文化施設とネットワークを構築していくことも目標にしています。

アート夏まつり

(2007年ー)

地域の方々と子どもたちが、アートを体感して、発見、交流が生まれる場所をつくり出していくことを目指す。「子どもに見せたい舞台」をはじめ、テーマにちなんださまざまなアートプログラムを実施している。



子どもに見せたい舞台

(2007年ー)

子どもたちに舞台の楽しさを知ってもらいたい、劇場を身近に感じてほしいとの思いから始まった企画。アート夏まつりのメインプログラムとして公演。2010年からは0歳児の入場も可能に。



©IIDA Kenki

Camo-Café(カモ・カフェ)

(2008年ー)

“みんなで作っていかフェ”をキーワードにオープン当初からさまざまなジャンルのアーティストとともにイベントやワークショップを開催。



©Kurihara Osamu

エントランスプロジェクト

(2010年ー)

エントランス(玄関)にあるカフェや校庭などを中心に、展開するプロジェクト。ジャンルを限定せず、気軽にアーティストや作品、空間と出会う場づくりを目指している。



オープンファクトリー

(2012年ー)

普段は公開されることが少ないアーティストの創作過程を公開するプロジェクト。にじすがも創造舎に足を運んでもらうきっかけとなるよう、長期間の開催としている。



ファクトリートーク

(2012年ー)

アーティストが作品を生み出すまでのプロセスや芽生えたばかりのアイデアを記録するプロジェクト。作品になる以前のアイデアや製作中に考えていること、作品を創り終えて思うことなど、アーティストの現在進行形の思考を収め、配信する。
<http://www.youtube.com/user/ARTSFAC>
TORYchannel?feature=watch



東京国際芸術祭(TIF)

(2005ー2008年)

日本を代表する舞台芸術の国際的フェスティバル。にじすがも創造舎もメイン会場のひとつとして国内外の多くのアーティスト作品を発表してきた。

フェスティバル/トーキョー(F/T)

(2009年ー) P52参照

体育館上演提携事業

提携事業として3公演を、体育館を会場に開催。

『ティンゲル・グリム』 2007年10月4日～14日

演出: 串田和美 美術: 宇野亜喜良

主催: (株)アートン/まつもと市民芸術館

『YAMANOTE ROMEO and JULIET』

2008年10月10日～19日

構成・演出: 安田雅弘

主催: 山の手事情社

『血の婚礼』

2011年6月24日～7月30日

作: 清水邦夫

演出: 蛭川幸雄

主催・企画・製作: Bunkamura

【主なプロジェクト】

「子どものいるまちかど」

(2004－2008年)

アサヒビール(株)と「芸術家と子どもたち」がアートの視点から子どもたちを中心とする地域への関心の掘り起こしや、新旧住民、世代を越えた地域住民同士のつながりを誘発しながら、「都市におけるコミュニティの再生」「新たな地域価値創造」を考えていく実験的共同アートプロジェクト。



「子どもとつくる舞台」

(2005－2008年)

NECと「芸術家と子どもたち」がパートナーシップを結び、2003年からシリーズで取り組んできたプロジェクト。ワークショップを通じて、子どもたちがアーティストと一緒に本格的な舞台作品を創作、上演した。



リーディング講座・リーディングフェスティバル

(2005－2011年/以降区内で展開)

リーディングの魅力とそのスキルを学び、リーディング・ボランティア活動に活かせる講座を開講。演出家・俳優から「聞き手に届く」方法やリーディングのポイントを学んでいく。



子どもと向き合う大人のためのワークショップ

(2005－2008年)

音楽、ダンス、演劇等各芸術分野の第一線で活躍し、子どもワークショップの経験も豊富なアーティストを講師に迎え、今までとは少し違った「子どもとの向き合い方」を学び、日々の活動や実践のヒントにしてもらうワークショップ。



演劇上演プロジェクト

(2005－2007年)

にすぎも創造舎で創作された作品上演を行うプロジェクトとして開始。体育館はオープン以来稽古場等として利用されてきたが、2005年のTIFを機に公演の場としての活用を開始し、同時に演劇上演プロジェクトvol.0「昏睡」上演が行われた。その後、vol.5まで継続し、07年夏以降は子どもに見せたい舞台やF/T公演としての上演に発展した。



©Masahiro Hasunuma

親子のための「ギロンと探偵のいる2年1組」

(2006年－)

絵本やおもちゃを揃えたプレイスペース「ギロンと探偵のいる2年1組」を会場に、親子・家族が一緒に楽しめるアーティスト・ワークショップやえほんの会・ライブなどを実施。



Greeting Greens ～グリグリプロジェクト～

(2005年－)

“グリーン(植物)+アート”をテーマに、畑づくりを通じて多世代の人が出会い、多様なコミュニケーションと、新しいコミュニティの形成を目指す地域交流型プロジェクト。



舞台芸術アーカイブ

(2006年－)

演劇・ダンス関連資料、雑誌に加え、アート関連書籍や絵本を多数そろえた資料室。初心者から舞台芸術について専門的に学びたい人まで、幅広く対応する。一部の資料は、カモ・カフェやサロンなどの共有スペースで閲覧可能。



フェスティバル／トーキョー（F／T）

フェスティバル／トーキョーは、池袋界隈の文化拠点（あうるすぽっと、にしすがも創造舎、東京芸術劇場）を中心に開催する、日本最大の舞台芸術のフェスティバルです。国内外から集結した先鋭的なラインナップと、フェスティバルならではの参加型プログラムを特徴としています。

ANJが主催してきた「東京国際芸術祭」が、東京都、豊島区等の行政機関との連携のもと、演劇・ダンスを中心に新作・世界初演を含む公演を行うパフォーミング・アーツの祭典としてリニューアルし、2009（平成21）年2月にスタート。同年9月から秋開催となり、これまでに120作品、30万人を超える観客／参加者が集いました。13年以降も引き続き開催が予定されています。

開催期間中は池袋周辺がF／Tカラーのフラッグで彩られ、東京芸術劇場前や池袋西口公園は各種イベントで盛り上がりを見せます。

2012（平成24）年には、豊島区がF／T事業を含む4事業で「池袋／としま／東京アーツプロジェクト事業」を立ち上げ、文化庁の助成（平成24年度地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ事業）を得ました。まさに豊島区がF／Tを中心とした地域の活性化と、国際的文化事業に力を入れている証となっています。



主催：フェスティバル／トーキョー実行委員会
東京都、豊島区、東京文化発信プロジェクト室、東京芸術劇場（公財）東京都歴史文化財団、（公財）としま未来文化財団、NPO法人アートネットワーク・ジャパン

F／T 12
たつたひりの中庭
ジャン・ミシェル・プリノイ
エール／LFFs

©Yohji Kato

文化で日本を引っ張っていく

東京芸術劇場館長 アサヒグループホールディングス(株)相談役 福地茂雄

区制施行80周年、誠におめでとうございます。

私は2008年から、としま文化フォーラム顧問として豊島区の文化政策に携わらせていただいておりますが、都市が持つ可能性、即ち都市力は、その都市の文化度の高さと同比例していると感じます。もちろん、大きな都市が文化を包容する力を持つことは当然ですが、豊島区はそうした中でも、とりわけ文化度が高いと常々感じています。これは、産官学界が一体となってつくりだした賜物であり、押し付けではないからこそ、長く、そして大きく続くものだと思います。

生活、つまり地域の中に文化があることで、人は地域とつながり、それにより自分の住む地域に誇りをもつことができます。ですから、魅力ある地域づくりのためには、文化活動は大変重要なことなのです。

昭和初期から戦後にかけて、池袋周辺に若い芸術家に移り住み、創作に励み、友情を育んだコミュニティは、芸術家が集まっていたパリのモンパルナス地区にちなみ、「池袋モンパルナス」と呼ばれました。その精神を引継ぎ、現在では「新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館」などの取り組みも行われていますが、こういった地域が一体となった草の根での文化への取り組みが、施設などの形だけでない、心の部分での力強い文化の醸成に必要なのです。

生活の中に文化があり、そこで生活する人々が文化によって地域に誇りをもつこと。これからの日本社会が必要なことを、豊島区はまさにさががけとなって取り組んでいます。文化は社会を形成する人々の知恵の総体です。昨今、日本経済は厳しい環境下におかれています。文化への取り組みは、経済再生を含めた社会創造への力の源泉となるものだと私は確信しています。

また、この高いレベルの文化を区の財政と両立させていることも、注目すべきことです。これは街を愛し、文化を愛する高野区長のたぐいまれなる行政手腕によるところが大きいことは間違いありません。

区制80周年は通過点です。これをジャンピングボードにして、これからの90周年、100周年に向け、産官学界で作り上げた文化をさらに習熟させ、東京を、日本を引っ張っていくことを期待しています。

みらい館大明

施設に愛着をもった、地域住民による自主管理運営

開設までの経緯

「みらい館大明」は、2005(平成17)年3月末に閉校した豊島区立大明小学校の跡施設を利用し、同年10月にオープンした生涯学習施設です。「地域づくり」と「学び」を事業の柱に、地域のサークルや勉強会、周辺大学の劇団等、団体への施設の貸出、地域交流イベントの開催、子ども・若者・シニア向けの講座やワークショップ、セミナーの実施、国際交流などを行っています。

管理・運営しているのは、地元住民の有志が立ち上げたNPO法人いけぶくろ大明です。代表の杉本カネ子さんは長くこの地で美容室を営み、日頃から地域の人たちと接してきました。1997(平成9)年1月に策定された「豊島区立小・中学校の適正化第一次整備計画」に基づき、大明小学校の閉校が決まると、跡地利用について多くの声が上がったといえます。

「一番の心配は地域の防災拠点がなくなることへの不安でした。私は92(平成4)年から、学校の空き教室を積極的に地域に提供するという豊島区の取り組みである学校開放運営委員会で活動していたのですが、災害時の避難所がなくなったら困る、売却せず、地域の人に貸し出すようにしてもらえ

みらい館大明

〔管理運営〕

NPO法人

いけぶくろ大明

〔所在地〕豊島区池袋

3-30-18

〔施設概要〕

〈1階〉オーデイオルーム、

レクルーム、会議室、和室、

小和室、文化教室

〈2階〉体育館、会議室、

小会議室2室、パソコン

ルーム、工作室

〈3階〉音楽室

〔開館時間〕9時～21時

〔休館日〕年末年始(12月

28日～1月4日)、保守点

検のために臨時に休館する

場合あり



ないかという意見が寄せられたんですね。そこで『大明小学校廃校後の施設を考える会』を発足し、03（平成15）年7月、豊島区議会へ『既存施設を利用して高齢者施設、福祉・スポーツ、乳幼児と親、小学生、中高生の集まれる場所にしてほしい。事業の立ち上げ・運営はNPO組織やボランティア団体が行う』とした請願書を提出したところ、採択されました」

その後杉本さんは「大明小学校跡施設検討組織発足準備会」を組織。「大明小学校跡施設活用協議会」を開催、8回の検討会を経て報告書をまとめ、2005（平成17）年4月^{※1}、報告会を行いました。

①施設等の無償借用、②独立採算による施設運営、③地域住民による運営管理を前提とし、生涯学習やまちづくりに関する事業を展開することを打ち出したところ、豊島区の目指す「住民に最も身近な自治体として、さまざまな主体の参画と協働による『わかりやすい区政』『区民の目線での行政運営』」に合致、計画は大きく動き出すことに。近くにあった豊島区立青年館が老朽化で閉鎖されることも背景にありました。

同協議会は「大明小学校跡施設運営協議会」に移行し、区との間で協議を重ねる一方、「いけぶくろ大明」としてNPO法人を申請。同年9月、「大明小学校跡施設の地域住民による自主管理運営に関する協定書及び使用貸借契約」を締結^{※2}。「みらい館大明」が誕生しました。

公募により決まったみらい館大明のロゴマーク



※1
内閣府の地域再生計画「文化芸術創造都市の形成」としまアートキャンパス計画」の認定を受ける。

※2
当初は、社団法人豊島医師会に使用許可している部分及び共用部分II Aを除く1・2階部分についても。2006年6月から校舎3階部分、同年9月からAも含めて無償貸付し、利用者への共用を開始。

運営体制と、地域への波及効果

スタッフは常勤2名、非常勤2名、窓口スタッフ(パート)10人で構成されています。そして、運営を支えている大きな力が、約20人のボランティアです。

「卒業生と学校の元主事の方がバックアップしてくださり、草むしり、窓や廊下などの清掃を率先して行ってくださっています。やはり学校への愛着というのが大きいですね。『大明小学校跡施設検討組織発足準備会』立ち上げにあたって、ボランティアというのが大きいですね。『大明小学校跡施設募集したところ、私を入れて50人が集まりましたが、うち20人が卒業生のネットワークで駆けてくれたのです。『自分たちの思い出をなくしちゃいけない』という思いだったのでしょうか』

利用者・登録団体は、年々増加しています。「安価な料金と、ロケーションのよさ、また、利用者の条件を区内在住・在学・在勤者と限定していないことから、都内だけでなく近県からも申し込みがあり、稼働率がいいです。長期利用や、さまざまな割引、マイクや椅子などの備品を無償で貸すという使い勝手のよさもあるようです。人件費を圧縮しているのもありますが、黒字経営が続いています。

みらい館大明という生涯学習の拠点ができたことで、住民が地域に関わるきっかけとなったり、住民同士の交流が盛んになったという実感があります。さまざまな季節イベントも、年々口コミで参加者が増えています」



毎年盛況のさくらまつり



2011年8月に開催された「生ごみ先生のおいしい食と子育てに関する内容で新規参加者を開拓した」

大人数の団体やテレビ、映画のロケで使用する業者には、地元のお弁当や仕出しを利用するように促したり、季節イベントの際に池袋坂下商店街に模擬店の出店をお願いするなど、地域の活性化にも力を入れているといます。住宅地という場所柄、近隣への騒音など神経を使うことも多いそうです。

生涯学習センター本格開設に向けて

豊島区は、2016(平成28)年度に生涯学習センターの開設を予定しています。NPO法人の取り組んだ成果を活かし、みらい館大明にオープンする計画です。

体験型の講座の実施や、講座をきっかけに参加者が自主グループをつくったりするなど、一定の成果はありましたが、主力となる講座や事業を拡大することが課題だと杉本さんは言います。

「リピーターは多いのですが、ステップアップする展開がなかったり、もともと地域と連携した企画を立てていきたいと思えます。7年間で地域に浸透したといっても、ふらりと立ち寄ってくれる人は少ない。集客や告知、利用団体へのさまざまなサービスも課題ですね。また、今後は若者支援事業に力を入れるなど、将来、生涯学習センターの本格開設に向けて、実現可能性や利用者ニーズを考慮しながら、プロジェクトを増やしていければと思います」

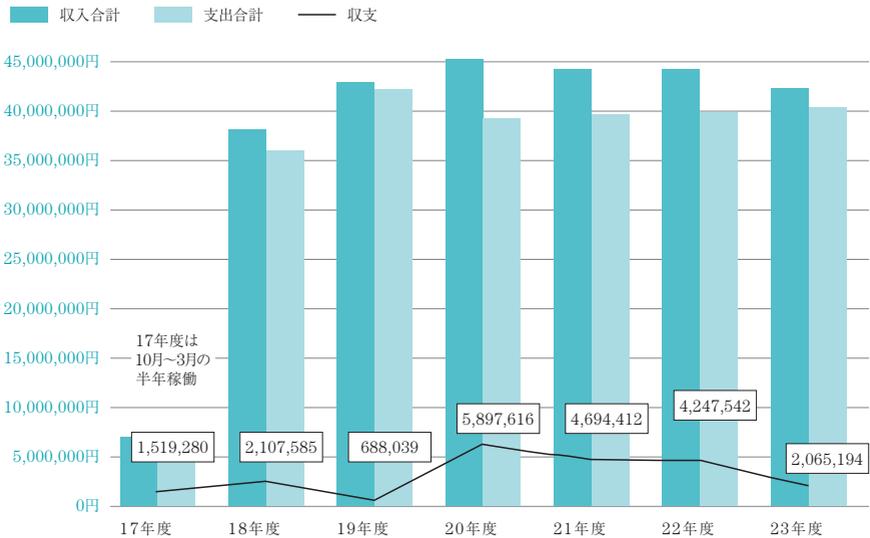


「みらい館大明まつり」でのアートワークショップの様子

© Takashi Kakumura

みらい館大明 年度別収支

	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度
収入合計	6,371,606	37,942,910	42,671,216	45,010,397	44,132,790	43,966,268	42,163,361
〈内訳〉							
施設貸出(一般貸出)	2,764,720	19,019,692	18,704,180	19,774,830	17,194,760	18,736,490	18,043,850
施設貸出(撮影)	1,640,862	9,530,180	9,688,900	11,132,500	12,077,600	10,516,965	10,577,500
施設貸出(長期利用)	808,000	6,003,800	10,644,000	10,184,000	10,704,000	10,404,000	9,114,000
講座等事業収入	621,820	1,364,500	941,200	1,156,936	1,583,900	1,560,000	1,803,750
その他	536,204	2,024,738	2,692,936	2,762,131	2,572,530	2,748,813	2,624,261
支出合計	4,852,326	35,835,325	41,983,177	39,112,781	39,438,378	39,718,726	40,098,167
収支	1,519,280	2,107,585	688,039	5,897,616	4,694,412	4,247,542	2,065,194



みらい館大木の事業体系

「地域づくり」事業

施設貸出事業

「地域の拠点づくりとみらい館大木の運営を支える収益源」
地域のサークル団体、周辺大学の劇団等の活動場所、小学校の口ケーションを活かした映画やドラマなどへの撮影場所の提供

地域交流イベント

「住民が地域に関わるきっかけづくり、住民同士の交流」

- 季節ごとのイベント
4月のさくらまつり、8月の花火大会、10月のみらい館大木まつり、1月のお正月マツドまつり
- 映画上映会
シニア、ファミリー向け映画プログラム「大明シネマ」、若者向け映画プログラム「Tear me シネター」
- 朗読まつりや演劇まつりなどの文化芸術イベント

防災の拠点

「災害時の避難場所、防災活動の実施」

「学び」事業

子どもの健全育成／対象…幼児～小・中学生

● いけぶくろ自然クラブ（協働者・NPO法人としまNPO推進協議会）
自然体験や他世代との交流を通じて、感受性や行動力を身につける

● 子どもモノづくり学校
ものづくり体験を通じて表現力、問題解決能力を育む

● 若者支援／対象…高校生～20歳代の若者（協働者・豊島区、NPO法人NEWVERY／豊島区生涯学習センターモデル事業）

● おとな大学
参加型の講座を通してさまざまなおとなや同世代の若者と学びあい、社会の中で自立できる力を身につける

● Book Cafeたいめい
2013年度より旧図書室を活用し実施予定

● 生涯学習／対象…全年齢（主にシニアを想定）

● 講座！ みらい館大明小学校
大人向けにアレンジした国語、算数、理科、社会、音楽、体育などを学ぶ
新しい学びに関心をもつ入り口、学びを共有する仲間づくり

● 文化に関する講座・セミナー
パソコン教室、俳句、朗読、語学、食に関する講座など

● 国際交流／対象…豊島区在住の外国人及び地域住民

● 異文化体感イベント（協働者・NPO法人メコンクラブ）
さまざまな国の文化を楽しく体感することで、異文化への理解を深める

● 日本語サークル
豊島区在住外国人が地域に入るきっかけづくり

あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）と

豊島区立中央図書館

劇場と図書館が一体となって新たな価値を創造

2007（平成19）年、東池袋4丁目地区市街地再開発事業の一環として建設された「ライズシティ池袋」内のライズアリーナビルに、「あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）」と、「豊島区立中央図書館」がオープンしました[※]。ともに単なる公共サービス施設ではなく、地域のブランドを高め、新たな価値を創造し発信する拠点となる劇場＋図書館が一体化した施設です。

「あうるすぽっと」はビルの2、3階に位置し、3001人収容の劇場を中心に、オリジナル作品の自主企画公演をはじめ、内外の優れた劇団や文化芸術団体との提携・

共催によるタイアップ公演や、ワークショップ、レクチャーなどの教育普及事業を展開しています。

「中央図書館」はビルの4、5階にあり、平日夜10時まで開館しています。オープン1年足らずで、来館者100万人を突破しました。劇場の公演に合わせてあうるすぽっとスタッフが関連図書の見学を行ったり、図書館所蔵の関連資料を劇場内のホワイエに展示したりと、両施設の連携を行い、相乗効果をあげています。



※「あうるすぽっと」の床面積は2993.119㎡、「中央図書館」の床面積は3065.47㎡、両施設の床取得価格は69億9137万3000円。

舞台芸術交流センター、中央図書館の役割

粕谷一希

劇場と図書館が今の場所に移ってきて、本当に賑やかになった。今は離れているが日出小学校跡に本庁舎が移る2015（平成27）年には、東通りからジユンク堂本店までもっと賑やかになるだろう。まちの中心が移動するわけだ。それに21世紀型のトラム・カー（路面電車）が走り出せば池袋全体が変わってくると思う。

東京の国会図書館が1日1000人、中央図書館が3000人、その来館者の数の多さがわかるうというものだ。舞台芸術交流センターもほぼ100%の稼働率だという。

まちづくりは何を中心につくるかで変わってくる。大谷光瑞^{おおたじろすけ}という偉人は、築地の本願寺、京都の堀川通りの西本願寺を伊藤忠太という設計者にまかせ、『中央公論』を滝田樗陰^{たきたちゆういん}にまかせ、本願寺の差配を社長として送り込んだ。それが中央公論社の始まりである。

都市にも頭脳がなくてはならない。大谷光瑞は西洋社会を見てそれを悟り、日本でも頭脳を考えたわけだ。滝田樗陰は文学部で漱石を学び、法学部で吉野作造を知った。このことが総合雑誌の発想につながる。

学校や病院ではなく、新聞でもなく、総合雑誌と考えたところが面白い。総合雑誌は今日まで生きている。本願寺も東京の中心にある。そして料亭や劇場もその辺りにある。

人間社会の頭脳とは何だろう。繰り返し、そのことを考えることが大切だろう。単に、高層建築を建てればよいわけではない。大学や新聞も大切だ。

劇場は社交の中心である。その芝居が面白ければ、社交も華やかになる。図書館と劇場がひとつの場所で話題の発信地となれば、その対話は十分、人々を引きつけるだろう。最近、トルストイの『イワンのばか』が話題になっている。アラビアンナイトも面白い。面白いが『イワンのばか』は子供たちに逆説というものを教えてくれる。ドストエフスキーやアンデルセンだけではなくトルストイも偉大な存在だ。

かすや・かすぎ

編集者、評論家。1930

年豊島区生まれ、在住。東

京大学法学部卒業後、55年

中央公論社入社。67年より

『中央公論』編集長。78年

中央公論社退社。86年、『東

京人』（現 東京都歴史文

化財団発行）創刊、87年都

市出版株式会社設立。現在

同相談役。2001年より

『ふるさと豊島を想う会』

発起人として、区の文化政

策のアドバイザーに。06年

より豊島区図書館行政政

策顧問、08年豊島区主催

『図書館サミット』実行委

員長。

あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）

舞台芸術の創造と発信、担い手の育成を通して、地域ブランドを形成

あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）は、豊島区が舞台芸術の創造・発信・育成の場として開設した施設です。「あうるすぽっと」とは、公募名称を参考に、豊島区、池袋と縁の深いフクロウの英語名（OWL）に逢い集うという意味を重ね、舞台芸術を中心に人と文化が集い出会う場所（SPOOT）という意味を込めて名づけられました。舞台芸術の創造と発信、担い手の育成を通じて地域ブランドを形成し、地域の賑わいの創出とまちの活性化を図ることを目的としています。

劇場内部は、舞台演出が際立つブラックボックスの空間。千鳥状に配置された301席の客席は、舞台が見やすく、臨場感、一体感を感じるつくりとなっています。自主企画公演・タイアップ公演で質の高い作品を上演するほか、教育普及事業をもうひとつの大きな柱にしており、地域住民との協働、地域の文化教育施設との連携など、基礎自治体の強みを活かしたワークショップを多数展開しています。たとえば、2008（平成20）年から継続している「にゅ〜盆踊り」は、ダンスカンパニー・コンドルズを主宰する近藤良平氏が豊島区のために制作したオリジナル盆踊りです。豊島区内複数の会場で開催されるワークショップで踊りのリーダーを育成。池袋西口公園で開催される大会は3500人もの人を集め、池袋の夏の新しい風物詩となりつつあります。「からだの詩を楽しむ」では、都立大塚ろう学校とNPO法人「大塚クラブ」と協働。パントマイムを通じて、障害のある子どもた

「施設概要」劇場（ブラックボックスタイプ、301席）、ホワイエ（約200㎡）、カフェスペース（約80㎡）、楽屋4、会議室2



「施設開設までのあゆみ」
2000年12月、東池袋四丁目再開発ビル交流施設のあり方検討委員会発足、01年7月基本計画策定、02年12月実施計画策定、03年7月東池袋交流施設整備推進プロジェクトチーム発足。04年2月施設建築物等の工事着手、07年1月工事完了、同年9月オープン

ちから表現の可能性を引き出すアウトリーチ活動を行っています。

また、舞台芸術作品の制作や公共劇場の運営ノウハウの習得を目指す学生等を対象にしたインターンシップ(アートマネジメント研修プログラム)を実施。9カ月という長期にわたり、第一線のクリエイターや劇場の運営スタッフとともに、文化行政全般を学べるものとして、毎年採用数の2〜4倍の応募があり、若い世代のキャリアアップにつながっています。

他の公共劇場との連携も、積極的に行っています。座・高円寺(杉並区立杉並芸術会館)、ピッコロシアター(兵庫県立尼崎青少年創造劇場)、ala(可児市文化創造センター)、K A A T(神奈川芸術劇場)との共同プロデュース公演や、北九州芸術劇場プロデュース作品の招へいなど。これらは、公共劇場としてのブランドの全国的な発信につながっています。

区民へのサービスでは、1月と5月の2回、計30日程度、「あうるすぽっと区民シリーズ」と称する区民優先の劇場利用枠を設定しているほか、チケットの区民割引制度や高齢者の無料招待など、親しみやすい施設づくりをしています。*

豊島区、とりわけ池袋周辺には、東京芸術劇場、サンシャイン劇場、シアターグリーンなど、さまざまな劇場・ホールが点在しています。それぞれの劇場・ホールが個性ある活動を行うことで相乗効果生まれ、「演劇のまち・池袋」がますます輝きを増すことを目指しています。



近藤良平・コンドルズ池袋
大作戦!!

あうるすぽっと「にゅ〜盆
踊り」大会

2012年7月29日(日)

出演・近藤良平、コンドルズ、
ストライク、タマル

企画製作・あうるすぽっと

◎浦井直志

※区民シリーズでは、会場
使用料の減免措置(25%オ
フ)が適用される。高齢者
には、文化芸術面からいき
いきとした暮らしをサポート
とする劇場を目指し、「お
となのア카데미」と称し
て、さまざまな芸術に触れ
る機会を提案。主催事業
において、豊島区在住の65
歳以上を対象に公演の無料
招待、ワークショップの無
料参加を実施した(平成23
年度は3事業対象)。

劇場・会議室の来場者と稼働率

平成 19 年度 (※)

来場者	57,959 人
劇場稼働率	97.7%
会議室稼働率	67.6%

平成 20 年度

来場者	121,969 人
劇場稼働率	98.3%
会議室稼働率	73.3%

平成 21 年度

来場者	122,959 人
劇場稼働率	97.8%
会議室稼働率	73.3%

平成 22 年度

来場者	123,658 人
劇場稼働率	99.4%
会議室稼働率	73.1%

平成 23 年度

来場者	136,784 人
劇場稼働率	99.1%
会議室稼働率	81.7%

※

平成 19 年度の稼働

劇場 平成 19 年 9 月～20 年 3 月

会議室 平成 19 年 8 月～20 年 3 月



「あうるすぽっと」ロケ
ク
デザイン・K2 アート
ディレクション+デザイン
長友啓典/イラストレー
ション 黒田征太郎

平成 23 年度 あうるすぽっと 事業記録

プロデュース公演・主催公演

あうるすぽっとプロデュース

「家電のように解り合えない」

あうるすぽっとクリスマスコンサート

おとなのためのヴィンテージミュージック「冬のタンゴ」

主催公演

おもいのまま

おやすみ、かあさん

第 2 回 日韓演劇フェスティバル

教育普及事業

アートマネジメント研修プログラム

あうるすぽっと伝統芸能講座「第二回 文楽・浄瑠璃ワークショップ」

あうるすぽっとバックステージツアー

にゅ～盆踊り

鴨下信一「日本語の学校」

学習院大学大学院身体表象文化学専攻提携事業「演劇を学ぶ!」

視覚障害者舞台鑑賞ボランティア講座

あうるすぽっとホワイエリーディング 劇団昴「クリスマス・キャロル」

熊谷和徳「TAP the FUTURE in toshima 2011」[X'mas Dream of TAP]

小野寺修二による「ハートタイムワークショップ」[からだの詩を楽しむ]

あうるすぽっと講演ライブ「講演のハナシ」

あうるすぽっと舞台技術講座「舞台監督の仕事」

多角的ワークショップ&ライブ

「泣き知らず怖いもの知らず」「泣き知らず大オーケストラ公演 池袋大作戦!!」

としまっ計画(日本大学芸術学部との共同研究事業)

あうるすぽっと周辺地域の交流のための、演劇的手法を用いた

「地域と劇場をつなぐ接点」をつくることを目的としている

2011/2012 あうるすぽっとタイアップ公演シリーズ

シーエイティブロデュース「NOISES OFF」

日本+韓国+スイス 国際共同製作作品 TACT/PRODUCT

「わたしにさよなら 青春編」

アトリエ・ダンカン プロデュース「ヒグマリオン」

東京タンパリン・東京日仏学院共同企画「破産した男」

華のん企画「三人姉妹」

木山事務所「出番を待ちながら」

トム・プロジェクト・プロデュース「嫉妬・混む!」

ACC「シルク・ヴィヴァン!」

北九州芸術劇場プロデュース「テラボット」

仲道郁代×内藤裕敬共同企画「窓の彼方へ」

その他提携事業

落語のハナシ 番外編

第 23 回 池袋演劇祭 関連事業

F/T11 フェスティバル/トーキョー

第四回 小田島雄志 翻訳・戯曲賞

JATET FORUM 2011

あうるすぽっと区民シリーズ

豊島区立中央図書館

文化発信・地域活性化のコアとして

豊島区立中央図書館の基本コンセプトは、「豊島区の情報センター」「進化した図書館」「経営の重視」です。本の貸出を基本とする図書館機能に加え、豊島区が保有する文化・芸術の紹介、区内で上演・実施される演劇、音楽、講演会等の情報提供や記録の蓄積など、文化・芸術の情報発信機能を充実させています。また、利用者のニーズに対応したレファレンスサービスやビジネス支援を行い、課題解決型図書館として機能することや、平日夜10時まで開館し、休館日も月2日とするなど、区民や来街者が利用しやすくなっています。

「時代を変える 図書館サミット」

2008(平成20)年11月12・13日、活字文化の発展を目的に、「時代を変える 図書館サミット」を開催しました。豊島区と区内6大学の大学図書館や(財)文字・活字文化推進機構、印刷関連団体などで行く図書館サミット実行委員会の共催で、読書・活字離れの解消、文字・活字文化の発展とITの高度利用、出版・印刷等、本をつくり送り出す人々との協働、地域の課題解決と文化創造をテーマに講演、スピーチ、シンポジウム、分科会に分かれての討議が行われ、最終日にはマニフェストが全国に発信されました。また、開催を記念して行われた作文コンクールでは、小学生の部



〔施設概要〕(4階児童コーナー、10代のコーナー、一般図書(レファレンス、ビジネス支援含む)、新聞・雑誌、閉架書庫、リフレッシュスペース(5階)文化芸術コーナー、一般図書、大型美術書、文庫・新書、視聴覚資料コーナー、点字図書館、図書25万冊、新聞・雑誌270タイトル、視聴覚資料1万5700点、閲覧席240席、自動貸出機5台、利用者用検索機12台(2013年2月現在)

〔施設開設までのあゆみ〕
2001年6月、豊島区中央図書館移転基本計画策定
03年11月、新中央図書館移転実施計画策定、05年12月、

519点、中学生の部46点、高校生以上の部45点、計610点の応募があり、それぞれの部で最優秀賞1名、優秀賞1名、佳作4～6名を選定しました。

プログラム

第1日 11月12日(水)13時～17時

会場	あうるすぽっと
総合司会	肥田美代子 (財)文字・活字文化推進機構理事
基調講演	「学問と情報」長尾 真 国立国会図書館長
スピーチ	「書物と文化」福原義春 (財)文字・活字文化推進機構会長
シンポジウム	「図書館は新しい時代をつくれるか」
司会	榊山紘一 印刷博物館館長
パネリスト	西垣 通 東京大学大学院情報学環教授 御厨 貴 東京大学先端科学技術研究センター教授 菅野昭正 世田谷文学館長 澤地久枝 作家

第2日 11月13日(木)10時～15時

会場 自由学園明日館

分科会

■ 第1分科会 「図書館の新しい役割」

パネリスト	公文俊平 多摩大学教授 情報社会学会会長 清水 徹 明治学院大学名誉教授 石井 昂 (株)新潮社常務取締役 近藤信行 山梨県立文学館館長 森まゆみ 作家
モデレーター	牛崎 進 立教大学図書館事務部長

■ 第2分科会 「本をつくり送り出す人々と図書館」

パネリスト	永井伸和 米子市(株)今井書店会長 清田義昭 (株)出版ニュース社代表取締役 梅見 博 (株)日本古書通信社編集長 久住邦晴 (株)くすみ書房代表取締役 岡田芳保 群馬県立土屋文明記念文学館館長 持谷寿夫 日本書籍出版協会図書館部門委員会副委員長 竹内修司 (株)文藝春秋元常務
モデレーター	

■ 第3分科会 「図書館と地域社会のつながり」

パネリスト	金澤 敬 調布市立図書館アカデミー愛とびあ代表 小松信彦 (社)日本図書館協会常務理事 巻田英人 大正大学附属図書館部長 福葉良太 東京音楽大学付属図書館事務長 中雄大輔 日本骨髄腫患者の会理事
モデレーター	伊藤榮洪 豊島区図書館専門研究員

全体討議

公演 阿刀田高 作家・日本ベンクラブ会長

マニフェスト発表

有識者による新中央図書館に対する提言、06年1月、図書館行政政策顧問に粕谷一希氏就任、同年12月、豊島区立図書館設置条例改正、07年4月、移転のため(旧)中央図書館休館、同年5月、統合のため雑司が谷図書館閉館、同年7月、(新)中央図書館オープン

「時代を変える 図書館サミット」 マニフェスト

私たちは、書物と読書が、知識の深化と文化の発展において果たす重要な役割を認識する者として、これを支える図書館がわが国において直面する難局についての危機感を共有し、また図書館の将来におけるありかたに強い関心と期待を掲げつつ、つぎのマニフェストを広く発信するものである。

- 公共図書館は、現在あって、自治体の財政難や一般的な活字離れなどの困難な状況のもとにおかれているとはいえ、その充実は、地域社会と自治体の活性化にとって不可欠である。
- 自治体は、地方分権時代における知の拠点として、みずからの政策形成に資するため、また地域住民の自立的活動を支援するため、公共図書館の蔵書の拡充に注力するとともに、専門的能力をもつ職員を配置して、その負託に応えるべきである。
- 図書館の職員は、出版・情報産業や研究者をはじめとする、各分野の専門家の助言を仰ぐなどして、選書のための技能を向上させ、さらに情報の整理・体系化によるサービス業務の高度化を図るべく、必要な資質の涵養に努めなければならない。
- 図書館のサービス業務にあたっては、進行するIT革命の成果を十分に活用し、また多様なメディアと協調のもとに、文字・活字文化のいっそうの振興に寄与することが肝要である。
- 国立国会図書館、公共図書館、大学図書館、学校図書館をはじめとする各種の図書館は、広範な利用者との不断の対話を継続するとともに、各館の相互の交流と連携をととして、読書への愛着と知識への情熱を高揚させ、社会と文化の成熟に貢献することが要請される。

平成20年11月13日
「時代を変える 図書館サミット」の参加者を代表して
実行委員会委員長 粕谷 一希



地域文化・伝統文化の継承と発展

区内には、地域に根ざした歴史的な文化資源が数多く存在しています。これらの豊かな文化資源を再発見し、現在、未来へと発展させていくことによって、地域への理解を深め、区民の誇りや連帯感を育むまちづくりを展開します。

池袋モンパルナス関連事業

「池袋モンパルナス」とは

昭和の初めから戦前にかけて、豊島区の西部地区にあたる長崎・千早・要町地区には、多くのアトリエ付きの貸家やアパートが建ち並んでいました^{※1}。芸術の都・パリのモンパルナスのごとく、芸術家や作家、詩人など、全盛期には1000人ももの表現者たちが住み、日夜熱く語り合い、遊び、切磋琢磨して制作に没頭しました。この界限を、詩人の小熊秀雄は1938（昭和13）年に発表した詩のなかで「池袋モンパルナスに夜が来た 学生、無頼漢、芸術家が街に出る……」と表現しています。

この地で過ごし、才能を開花させた芸術家は、小熊秀雄、長谷川利行、松本竣介、^{あいまつ}鬚光、峯孝、高山良策、丸木位里・丸木俊、麻生三郎、長沢節、野見山暁治、吉井忠、寺田政明、春日部たすく……と数



※1
長崎アトリエ工村の形成

豊島区成立以前の長崎町に、芸術家が住み始めたのは大正時代の中頃以降と言われる。1924（大正13）年、詩人の花岡謙一が経営する

え上げればきりがありません。まさに豊島区の近代史を語る上で欠かすことのできないテーマといえます。豊島区立郷土資料館では、芸術家たちの日々の暮らしぶりや、残された作品などについて調査・研究を行い、その成果を常設展示や特別展、調査報告書などで明らかにしてきました^(※1)。

一方、区民による活動も起りました。1990(平成2)年に刊行された『池袋モンパルナス』(宇佐見承著・集英社刊)に感動した人たちを中心に、99(平成11)年「池袋モンパルナスの会」が発足。アトリエ村のまち歩きや演劇公演の応援、作品展や作家とのトークなど、歴史を掘り起こし、ゆかりの作家と彼らの精神を顕彰する企画を実施しています。会はまだ、『池袋モンパルナス叢書』を刊行しています。

「池袋モンパルナスの会」の目的には、このような記述があります。「今日日本は、これまでの社会の枠組みが崩壊していき、(略)『個』としての生き方と共同体のあり方を見つめ直す必要に迫られていると言えます。『池袋モンパルナス』の芸術家たちは、『自分らしく』生きようとして自己の表現を求めて苦悩し、時代に翻弄されました。ここから、私達は何かを学びとることができるのではないのでしょうか」「芸術家達を受け入れ熱気の『るつぽ』となった池袋の街、その秘密はどこにあったのか。文化と経済の両面から解明することにより、地域社会のあり方を考えたいと思います」^(※2)

2000(平成12)年4月には、練馬区立美術館で「池袋モンパルナス展」が開催され、準備の一端として、アトリエ村、池袋の芸術家に関する再調査が行われました。ここでの新資料の発見や再整理を背景に、アトリエ村資料室³設置の機運が高まってきました。まち歩きイベント、アトリ

培風寮が、長崎町北新井(現在の要町1丁目)に建てられたのを皮切りに、31(昭和6)年頃から、アトリエ村の貸住宅が建てられ始め、一帯は「すずめが丘アトリエ村」と呼ばれた。36(昭和11)年からは豊島区長崎(仲町1丁目・現在の長崎2丁目)に「さくらが丘バルテノ」と呼ばれるアトリエ村賃貸家群が出現。このアトリエ村は、東京美術学校(現・東京藝術大学)に入居者募集の貼り紙がされたことから、多くの画学生が集まった。さらに現在の千早町2丁目あたりに「つじヶ丘アトリエ村」が建てられ、アトリエ村は全盛期を迎えた。

※2
<http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiyokan/> 参照

※3

「池袋モンパルナスの会」ホームページより

エ村イラストマップの制作、ワークショップの開催など、区民活動の熱気に呼応するように、05(平成17)年11月、閉校した旧平和小学校の旧家庭科室に「アトリエ村資料室」が開設されました(12(平成24)年3月末に休室、15(平成27)年度開設予定の(仮称)西部地域複合施設内に整備するミュージアムの一部に引き継がれる予定)。

また、豊島区は美術品等収集・活用委員会を設置して、小熊秀雄をはじめとする池袋モンパルナスに関連する作家の美術品等の収集に力を入れています。

08(平成20)年度からは、熊谷守一美術館3Fギャラリーでの所蔵品を中心とする企画展がスタート。作品展示のほか講演会やアトリエ村散歩の関連事業を実施しています。

【豊島区 池袋モンパルナス関連展覧会の概要】会場…区立熊谷守一美術館3階ギャラリー

2008(平成20)年度

「豊島区新収蔵作品 小熊秀雄展1」

豊島区が平成20年度に新たに収蔵した小熊秀雄(詩人・批評家・画家)作品のうち、1930年代の東京の街並みや風俗を伝える作品の一部を紹介。

会期——平成21年3月5日(木)～3月15日(日)

展示内容——絵画31点(油彩2、水彩8、素描21)

年譜、住居変遷地図、詩・文章、関連書籍

来場者数——1317人

「関連事業」——アトリエ村さんぽ道

「小熊秀雄のあるいた道

」——さくらが丘パルテノンから立教大学へ

日時…平成21年3月8日(日)

講師…本田晴彦氏(アトリエ村資料室)



写真上「小熊秀雄展2」の関連企画、講演会と詩の朗読の講師、アーサー・ピナーD氏(詩人)
写真下「桂川寛展」の展示風景



2009 平成21年度

「豊島区新収蔵作品
小熊秀雄展2 精神の暁をめざして

―交錯する光と影―

平成20年度に引き続き、平成21年度に収蔵した小熊秀雄作品の中から、小熊の多彩な視点と力強い側面を紹介。

会期 ― 平成22年3月4日(木)～3月28日(日)

展示内容 ― 絵画34点(油彩2、水彩9、素描23)、年譜、住居変遷地図、自筆詩、写真資料、文章、関連書籍

来場者数 ― 1870人

「関連事業」― ①アトリエ村さんば道「小熊秀雄のあるいた道」

日時…平成22年3月14日(日)

講師…玉井五氏(小熊秀雄協会会長、

本田晴彦氏(アトリエ村資料室)

②講演会と詩の朗読

「カユケテ痛くてくすぐつたくて」詩人を楽しませよう箱について」

日時…平成22年3月20日(土)

講師…アーサー・ビナード氏(詩人)

会場…西部区民事務所2階図書室

2010 平成22年度

「桂川寛展

まなざしの先にあるもの

1950-2000

池袋モンパルナスに立つ道標

シュルレアリスムから影響を受け、のちに実際の事件や社会状況を題材にした「ルポルタージュ絵画」といわれる作品を描いた桂川寛(1924年生まれ、千川在住)2011年没。そのまなざしの先にあるものを紹介。

会期 ― 平成23年2月17日(木)～3月6日(日)

16日間(2月17日、3月6日閉館)

展示内容 ― 絵画14点(油彩14、挿画原画入額2(18点、

挿絵2点、スケッチブック1冊、資料7点、写真3点

年譜、用語解説、関連書籍

来場者数 ― 1424人

「関連事業」― ①講演会「戦前の前衛―桂川寛の眼」

日時…平成23年2月26日(土)

講師…玉井五氏(小熊秀雄協会会長)、門田秀雄氏(美術家、美術評論家)

会場…西部区民事務所2階図書室

②アトリエ村さんば道「アトリエ村最後の絵描きを訪ねる」

日時…平成23年3月5日(土)

講師…本田晴彦氏(アトリエ村資料室)



2011平成23年度

「高山良策展 向こう側の気配」
形になる頃」

シュルレアリスム体験を経て、既成概念にとらわれない大胆な制作を行った高山良策（1917-1982）は、ウルトラニッパの怪物を造形したことで知られる。戦後から怪物をつくり始める1960年代半ばまでの作品を紹介。

会期——平成24年2月16日（木）～3月4日（日）

展示内容—— 絵画30点（油彩16、素描14）、DVD「怪物のあけぼの」、写真8、パンフレット2、年譜、用語解説、作品解説、関連書籍ほか

来場者数—— 1138人

「関連事業」—— ①講演会「高山良策の生涯と作品」

「絵が壁からシミのように湧き出てくるのさ」

日時…平成24年2月18日（土）

講師…土方明司氏（平塚市美術館館長代理兼学芸主管）

会場…西部区民事務所2階図書室

②アトリ工村さんぼ道「戦後のアトリ工村をあるく」

日時…平成24年3月4日（日）

講師…本田晴彦氏（アトリ工村資料室）

2012平成24年度

「寺田政明展 発芽する絵画」

2012（平成24）年で生誕100年を迎えた画家・寺田政明（1912-1989）は生きものや自然の風景など身の回りのものを凝視し、デッサンを大切にし、モチーフとの対話を重ねた。主に1930年代から1950年代までの豊島区やその周辺の風景、仲間たちを描いた作品を紹介。

会期——平成25年2月14日（木）～3月3日（日）

展示内容—— 絵画75点（油彩15、素描60）、写真、資料、年譜、用語解説、関連書籍

「関連事業」—— ①講演会

「寺田農氏に聞く 父、寺田政明について」

日時…平成25年3月2日（土）

講師…寺田農氏（俳優・東海大学文学部文芸創作学科教授）

土方明司氏（平塚市美術館館長代理兼学芸主管）

会場…千早地域文化創造館1階第2会議室

②アトリ工村さんぼ道

「アトリ工村の最盛期を訪ねる 寺田政明とそのなかま」

日時…平成25年2月23日（土）

講師…本田晴彦氏（アトリ工村資料室）



区立熊谷守一美術館

私設美術館から、豊島区初の区立美術館へ

自然の移ろい、小さな生き物たちや草花の息吹。「いのち」の輝きを見つめ、晩年は具象を突き詰め一切を削ぎ落とした、シンプルで抽象的な作風へと向かった画家・熊谷守一（1880-1977）。超俗の画家〚画壇の仙人〓とも呼ばれ、その生き方もまた、多くの人々の心をとらえています。

熊谷守一美術館は、守一氏が97歳で亡くなるまで、約45年間住んだ豊島区千早の旧居跡に、1985（昭和60）年5月、次女で画家の榎氏により私設美術館として開設されました。2007（平成19）年11月、守一作品の散逸を防ぎ、この地で作品が末永く公開され続けるようにとの思いから、榎氏より守一作品153点が豊島区に寄贈され、豊島区で初めての区立美術館となりました。

守一作品の常設展示のほか、3階には貸ギャラリーがあり、デッサン会やさまざまな作家の個展など、区民が美術に親しめる事業を展開しています。

多くの人がモリの絵を通して「いのち」に触れ、感じてほしい

熊谷榎館長インタビュー

守一は、何でも自分の目で確かめ、納得してじっくりと物事をすすめる人でした。私ははり

熊谷守一美術館

〔所在地〕豊島区千早2-27-6

〔開館時間〕10時30分～17時30分（入館は閉館の30分前まで）

〔休館日〕毎週月曜日・年末年始（12月25日～1月7日）、臨時休館あり

〔観覧料〕一般500円（16人以上4500円）、中・高・大学生3000円、小学生1000円、小学生未満無料（企画展によつて料金が異なる場合あり）

〔指定管理者〕株式会社権



熊谷守一美術館外観。設計は建築家の岡秀世氏。守一作品のモチーフが目を引く

絵から始まり、油絵、陶絵、そして70歳を過ぎて石の彫刻と、あれこれ手を出しているけれど、守一は油絵と墨絵、これだけに打ち込んだ人でした。東京美術学校（現・東京藝術大学）時代はセピア色にくすんだアカデミックな絵を、再上京してからはフォービズムへ、さらに太平洋戦争前後から、画面をはっきり線で区切り、面を平塗りする画風を確立、独自の世界を貫いていきます。晩年は小さな庭にやって来る虫たちや猫、鳥などに対峙し、やがて、太陽をかたどった同心円を重ねた一見抽象画風の作品へと変化していきますが、それは具象を突き詰めた末のものであったと思います。

ここに美術館を建てたのは、守一の絵を、観てもらいたかったから。また、かつてこの近隣にあったアトリエ村の画家、長谷川利行や寺田政明などがこの家を訪れていますが、そうした記憶も残っている場所でもあり、その雰囲気も感じていただければと思います。

豊島区立となってからは、要、千早、長崎小学校などから、学校単位で、より多くの子どもたちが来るようになりました。接していると、子どもは未来そのものだな、と嬉しく思いますね。また、豊島区の企画展で、障害をもつ方の展覧会を開催していますが、興味深い作品がたくさんあります。

文化が生活の身近にあるということは、大切なことです。私は小さな頃から絵を描くのが好きでしたが、戦中・戦後まもなくの食糧難を経て、大学進学するとき、「ひとりでも飢えている人がいる間は芸術どころではない。もっと役に立つ学問をやりたい」と、理数系を専攻した人



くまがい かや

1929年、熊谷守一の次女として生まれる。51年、日本女子大学卒業。54年、大阪梅田画廊ではり絵の個展を開催。その後油絵を手がけるようになり、山、雪、動物、人をテーマに毎年各地で個展を開催。85年、熊谷守一美術館を開館。現在も館長をつとめる。

ですよ。でも、父は、「飢えているからこそ絵が必要」だと言ったんですね。文化は食べるものと同じように、人間らしく生きるためには必要なものだ、今、ひしひしと感じています。モリが言ったことは正しかったんでしょね。

新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館

街のどこもが美術館

池袋モンパルナスの歴史的価値をふまえた文化振興の一環として、池袋西口の活性化とまちづくりに寄与し、「芸術文化は人を育て、それによってまちが育てられる」という精神を現代に引き継ぐことを目的に、毎年2週間にわたり開催されているアートプロジェクトです。

主催は新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館実行委員会（NPO法人ゼファー池袋まちづくり、立教大学、東武百貨店、豊島区）。「街のどこもが美術館」をコンセプトに、池袋駅西口周辺、立教大学周辺、要町・千川周辺、椎名町周辺の4つの地域の各所で美術展や芸術イベントを展開。東武百貨店、池袋西口エリアのギャラリーや銀行、喫茶店、地下鉄の通路など、約40カ所の会場で画家や子どもたちの多彩な作品を鑑賞できると同時に、若い芸術家の育成や文化によるまちづくりを推進しています。

【これまでの企画】「旧江戸川乱歩邸特別公開」、区内小学生の絵画作品を集めた展覧会「まちかど子ども美術展」、池袋モンパルナス関連のトークショー、子どもたちが中心になって描いたフラッグを商店街に掲げた「まちかどフラッグ美術館」、子ども向けのワークショップ「ものづくり体験教室」など。

（共催）東京メトロ、池袋西口商店街連合会、東武ホールセンター、ルミネ池袋、マルイシティ池袋、ビックカメラ、ホテルメトロポリタン、（公財）としま未来文化財団、東京芸術劇場



「まちかど子ども美術展」の展示風景

副都心を持つ

自治体・豊島区の

文化政策

片山泰輔

〔静岡文化芸術大学教授〕

1. 創造都市・豊島区

平成20年度の文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）を受賞したのは、札幌市、篠山市、萩市とともに豊島区であった。ユネスコのネットワークをはじめ、世界的に注目されている創造都市であるが、創造都市とは、「人間の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における

創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備えた都市」という佐々木雅幸氏の定義にもあるように、本来はイタリアのボローニャ、日本でいえば金沢など代表されるような中規模都市が想起されるものである。ただ、世界的な注目が集まる中、ベルリンやモントリオール、神戸や名古屋といった大都市も名乗りをあげてきている。しかし、東京という大都市の中の特別区が創造都市として表彰されるというのは、きわめて異例のことと言える。そもそも、創造都市というコンセプト自体が、ニューヨークや東京に象徴されるようなグローバル都市に対するアンチテーゼでもある。しかも、東京全体ではなくその中の一つの区にすぎない豊島区が創造都市における成功例として表彰されたのである。

豊島区にはいわゆる住民である夜間人口（23,141人、平成17年国勢調査）をはるかに上回る昼間人口（378,475人、同）があるだけでな

く、池袋駅の乗降者数約250万人が毎日、この区を訪れる。確かに、他の創造都市をはじめ、通常の「都市」という概念からは離れるかもしれない。しかし、そこにはさまざまな人が住み働き、学ぶ、集う、「自治体」があり、文化政策を担う政策主体が存在することは確かである。文化、芸術、科学などにおける人間の創造性が発揮されることによって、社会・経済の持続的な発展を実現していくことが重要である点では、他の創造都市となら異なることはない。

2. 豊島区の文化政策の先進性とその意義

このような豊島区の文化政策について、注目すべき点を見てみよう。

まず、高野区長のリーダーシップのもと、文化政策を重要な政策として位置づけ、平成14年の豊島区文化政策懇話会の設置、平成17年の文化創造都市宣言、平成18年の文化芸術振興条例

制定、平成22年の文化政策推進プランの策定と文化政策の体系化を積極的に推進してきたことがあげられる。文化は「カネとヒマのある人のための余暇娯楽」、「不要不急のもの」といった意識がまだまだ根強いわが国において、区役所内外に文化政策の重要性を体系的に示してきたことの意義は大きい。後述の諸事業もこうした区政としての文化政策重視の姿勢があつてこそと言える。

具体的な施策の中で、まず最初に注目されるのが、地域再生計画の認定による「にしすがも創造舎」の開設であろう。23区内でも、新宿区の芸能花伝舎^{※1}開設や足立区の東京藝術大学の芸能花伝舎^{※2}開設や足立区の東京藝術大学^{※3}誘致など、学校跡地を文化や芸術の拠点とする取り組みはみられるが、アートNPOの拠点とすることでこれを成功させた豊島区の事例は「新しい公共」の時代を先取りする貴重なモデルとなっている。運営を担う2つのNPOは全国的な知名度をもつアートNPOのフロント

※1

芸能花伝舎 新宿区と芸術協(公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会)が締結した「新宿区における文化芸術振興に関する協定」のもと、旧新宿区立淀橋第三小学校を芸術協が改修、芸能文化拠点として平成17年にオープン。11の稽古場のほか、芸能関連団体の事務所、新国立劇場の演劇研修所が入居し、それぞれの活動拠点となっている。また、子供向けの「芸術体験ひろば」「キッズ伝統芸能」、人間国宝を招いた「花伝シリーズ」や落語と音楽の「コラボレーション」創遊シリーズ」など様々なイベントを開催している。

ランナーであり、これらNPOの活躍が「にすぎず創造舎」の名を全国に広めている。筆者らが編集している大学向けアートマネジメントの教科書の中にも事例として収録され、全国の学生たちが先進事例として学ぶ対象となっている。優れたNPOの拠点であるということは、優れた人材が豊島区に常駐することを意味し、その人たちのネットワークがさまざまな人々の訪問を促すことになる。こうした人材の集積は、文化を活かした都市政策を進める行政や区内でさまざまな活動に取り組む人々にとっても貴重なパートナーを得ることになる。

次に、豊島区の政策として注目されるのは、平成19年に開館した舞台芸術交流センター（あうるすぽっと）である。池袋には平成2年に東京都が設置した東京芸術劇場がある。かつては貸館中心だったこの施設は野田秀樹芸術監督の就任以来、創造発信機能を強化させている。さらに前述のにすぎず創造舎は国際的な舞台芸術

祭である「フェスティバル／トーキョー」の拠点でもある。これに公演の自主制作をはじめとした創造機能をもつ劇場である「あうるすぽっと」が加わることで、豊島区が東京における舞台芸術の拠点であることを内外に示すことが可能になる。しかも、あうるすぽっとは、その正式名称が「劇場」ではなく「舞台芸術交流センター」であることからわかるとおり、単に舞台上の作品を制作、あるいは提供するだけの機関ではない。さまざまな人々を対象としたさまざまなワークショップを劇場内外で展開することで、演劇愛好家だけではなく幅広い人々の交流の場がつけられている。毎夏、池袋駅前の西口公園で開催される「にゅく盆踊り」は豊島区在住の著名な振付家である近藤良氏のもとで、事前のワークショップに参加した市民とともに、多数の一般市民が参加する大イベントである。演劇愛好家のためだけではない、「新しい広場」としての役割を果たしている。これは、平成24年

※2

足立区の東京藝術大学誘致
平成12年以降に区内千住地区の小・中学校の統廃合が進み、廃校跡地をどう活用するかの議論を背景に、平成17年のつくばエクスプレス開業で都市基盤の整備が進むことから「足立区文化産業・芸術新都市構想」が策定され、千住地域を中心としたまちづくりがスタート。東京藝術大学は平成18年9月に改修・増築された旧千寿小学校に千住キャンパスを開設。音楽学部の人形的リソースを活用しながら、足立区をはじめとする学外との連携企画についてマネジメントする「アトリイオンセンター」を立ち上げ、足立区内の小・中学校を中心とした音楽教育支援活動や、福祉と子育て支援事業、サロンコンサート等芸術によるまちづくり事業を行っている。

6月に制定された劇場・音楽堂等の活性化に関する法律(劇場法)^{※3}の理念を先取りしたものとと言える。

あうるすぽっとについては、同じ再開発ビルの中に入居する中央図書館とのコラボレーションも注目される。劇場という施設が、公演やワークショップ等の開催時間帯に集中して人々が集う施設なのに対し、図書館はその開館時間中、子どもから高齢者までさまざまな人々が常時出入りするタイプの施設である。図書館で定期的に行われる劇場関連展示のみならず、図書館利用者が直接目にする劇場イベントの案内ちらしや劇場来訪客の賑わいは、豊島区が舞台芸術の発信拠点であることを多くの人々に印象づけるものとなるろう。

最後に、豊島区の文化政策における注目すべき取り組みとして、平成19年度からスタートしたアートマネジメント専門職の配置を指摘したい。任期付きの非常勤職員という身分ではある

が、行政内部にアートマネジメントの専門性を持つ職員が常駐するという形態は東京23区の中でも初めての試みであった。行政職員には人事異動がつきものであり、その中で専門性を蓄積することは難しい。にすぎても創造舎やあうるすぽっとで展開されている創造的活動の成果やその意義を的確に把握し、それを行政内部や区民に対してわかりやすく伝えていくという役割を人事異動で着任したての行政職員が担うのは難しい面がある。専門性をもつ職員の存在は、これらを円滑に進めるとともに、前述の体系的な文化政策を区役所内に浸透させるうえで重要な役割を果たすものとなる。

3. 課題と展望

創造的環境の基盤としての多様性

現在東京では、渋谷、新宿、池袋という3大副都心の間で激しい競争が繰り広げられている。

※3

劇場・音楽堂等の活性化に関する法律(劇場法)前文より抜粋「劇場、音楽堂等は、文化芸術を継承し、創造し、及び発信する場であり、人々が集い、人々に感動と希望をもたらし、人々の創造性を育み、人々が共に生きる絆を形成するための地域の文化拠点である。また、劇場、音楽堂等は、個人の年齢若しくは性別又は個人を取り巻く社会的状況等にかかわらず、全ての国民が、潤いと誇りを感じることでできる心豊かな生活を実現するための場として機能しなくてはならない。その意味で、劇場、音楽堂等は、常に活力ある社会を構築するための大きな役割を担っている。さらに現代社会においては、劇場、音楽堂等は、人々の共感と参加を得ることにより「新しい広場」として、地域コミュニティの創造と再生を通じて、地域の発展を支える機能も期待されている。」

特に地下鉄副都心線の開通と私鉄との相互乗り入れによって、これらの副都心が単なる通過点にならないよう、しのぎを削っている。こうした中、文化発信の成否は副都心の盛衰にとって

の重要な鍵となっている。渋谷では平成24年夏に劇場やイベントホールを持つ複合施設である渋谷ヒカリエがオープンし、大きな注目を集めている。文化発信は、副都心経済の核である商業施設の繁栄に直結するだけでなく、地域の文化的イメージの向上は、住宅地としての魅力にも大きな影響を与える。豊島区内においても、新築予定の高級分譲マンションの広告には、あうるすばつとと中央図書館が写真つきで大きく紹介されている。文化の存在がマンションの付加価値を高めているのである。このことは、豊島区内の不動産価値が高まることであり、また、豊島区に高所得の人々を移住させることを意味する。特別区制度のもとでは、固定資産税収入が区の直接的な財源とはならないが、区民の個

人所得の増加は区民税に直結する。文化への投資が区の税収増をもたらす、という経済効果は区の持続的発展を支える財政基盤を考える上できわめて重要なものである。

しかし、文化イメージの向上によって地域イメージが高まり、それを求めて人々が移住してくるという経済効果には両刃の剣の面もある。地価や家賃が高騰することで、いわゆるジェントリフィケーション(Gentrification)といわれる現象が生じる危険性があるからである。経済的には豊かとは言えない人々がそこにいられなくなるといふ現象は、ニューヨークのソーホー地区をはじめ、芸術や文化によって都市再生を図ってきた世界中の都市でしばしばみられている。高級化は短期的にみれば税収効果をはじめとしたプラス面をもたらす面が多いが、経済的に豊かではない人々を地域から排除してしまうことは、若手芸術家やクリエイター等といった創造の担い手が豊島区を拠点にできなくなること

意味する。豊島区は昭和初期の池袋モンパルナスや昭和30年代の「トキワ荘」のような駆け出しの芸術家がそこに集い創造拠点とした伝統を持つ。都市社会学者リチャード・フロリダは創造的で発展している都市の条件として3つのTを掲げているが、技術(technology)、才能(talent)とともに、寛容性(olenance)は中でも最も鍵となるものである。経済的狀態、国籍、民族、価値観やライフスタイルなどによって人々が排除されることなく、多様な人々が共存できる寛容性のある環境こそが創造的な人々の能力が発揮される上で最も重要であるという指摘である。文化の創造発信によって文化的なイメージを高め、豊島区の資産価値や所得を高めていくことは重要であるが、それによって都市の創造性にとって不可欠な「多様性」が失われないようにしなければならぬ。毎日250万人が乗り降りする池袋駅を利用する多様な人々が排除されることなく、創造的な力をこの地域で発揮するこ

とができれば、豊島区には大きな可能性が生まれてくる。社会的弱者に手を差し伸べる福祉政策も重要であるが、実は、多様な人々を包摂する取り組みにおいて大きな力を発揮するのが劇場やアートNPOである。文化や芸術を通して多様なプログラムを活かすことで、心身の障害、国籍、宗教、価値観、世代等、さまざまな多様性を尊重しながらこれらを共生させていくことが可能になる。

文化政策は、単に文化やその愛好家のためにあるのではなく、地域の経済発展や社会的包摂等、地域社会全体の将来を大きく左右するものである。これからの豊島区の政策運営においては、担当課だけでなく、こうした総合政策的な視点のもとに、全庁をあげて政策に取り組むことが不可欠となる。

文化を支え、発展させる人材の育成

文化は、地域資源を活かしつつ新たな価値を再生する、多様な人々の営みによって育まれます。文化の創造・推進に不可欠な、担い手の育成につながるプロジェクトを紹介します。

としま文化フォーラム

「としま文化フォーラム」は、文化政策懇話会による「豊島区の文化政策に関する提言」（p.22参照）で示された「芸術文化創造環境づくり」の実現を目指す最初の取り組みとして、2004（平成16）年4月に始まりました。毎回各分野の第一線で活躍する文化人を講師として招き、文化のあり方を受講生とともに考え、豊島区のこれからの文化を担う人材を育てていくことを目的としたもので、豊島区、（公財）としま未来文化財団、東京芸術劇場の3者の協働により、実行委員会形式で実施されています。

東京芸術劇場を会場に、1期（約3ヵ月）5〜6回の講演会を開催。每期100名程度の受講生を募集。受講修了生には全講演会終了後、修了証が授与されます。

これまで特別講演会を含め、のべ106回の開催実績があります。2012（平成24）年まで東京芸術劇場の小田島雄志名誉館長が塾長を務めました。

おだしま・ゆうし

1930年旧満州生まれ。

英文学者、東京大学名誉

教授。シエイクスピア全戯

曲を80年に完訳。同年芸

術選奨文部大臣賞。93年か

ら東京芸術劇場館長（現名

誉館長）。豊島区芸術顧問

（2005年7月〜2012

年11月）。

創造の精神に触れること

小田島雄志

「としま文化フォーラム」の塾長として私が心がけていたのは、「楽しく、ためになる場」を創出するということでした。さまざまな分野で活躍しておられる第一線の方々を招き、受講生とおおいに交流していた。参加者が刺激を受け、新たな発見をし、そしてそれが創造と発信につながれば、と思いました。

こうした考えの原点には、私の経験がありました。1980年、私は作家・吉行淳之介さんの紹介で、タウン誌『銀座百点』(※)の座談会「銀座サロン」のホスト役に招かれることになりました。それまでの円地文子さん、戸板康二さん、池田弥三郎さんから、円地さん、吉行さん、私という顔ぶれになり、その後吉行さんと私、さらには私、村松友視さんという組み合わせで、25年続きました。このサロンで毎月、多彩なゲストの話の聞いたことが私の貴重な財産となりました。

フォーラムの受講生は、講師と直接顔を合わせて、その言葉をじかに聞き、芸術文化を創造する人たちの精神、その神髄に触れます。これを継続的に体験するうちに、参加するみなさんの文化力が向上していったのではないかと思います。

東京芸術劇場芸術監督の野田秀樹さんとコンドルズ主宰の近藤良平さんをお迎えした第100回の記念特別講演会では、第1回から第100回までのすべての講演にご出席いただいた2名の受講生を表彰いたしました。このようなロング・ランのフォーラムを続けることで、受講生とともに豊島区の文化レベルが確実に向上し、新しい文化活動が生み出される基礎となったのではないかと実感しています。

これもひとえに快く講演をお引き受けくださった講師の方々、熱心に耳を傾けてくださる受講生の皆様のお力の賜物です。区制施行80周年、そして東京芸術劇場のリニューアルを迎えた本年をきっかけとして、次の新たな一歩に向けて進んでいくことを祈っています。(談)

※『銀座百点』 1955
(昭和30年創刊)。銀座の
かおりを届けながら、情
報だけでなく銀座の文化を
表現することにポイントを
置いて編集されている。各
界の有名人によるエッセイ
座談会が有名(『銀座百点』
ホームページより)。



2008年度	第1期	5/21	堀内恒夫	野球評論家	私の野球人生
		6/4	寺田 農	俳優	父・寺田政明と池袋モンパルナス
		6/18	佐々木 愛	劇団文化座代表	舞台俳優として生きて
		7/2	加賀美幸子	アナウンサー 千葉市女性センター名誉館長	こころを動かす言葉
	7/16	小田島雄志	としま文化フォーラム塾長	シェイクスピアから見た「バラ」	
	第2期	9/24	童門冬二	作家	歴史にみる文化都市づくり
		10/8	謝珠栄	企画・演出・振付家	日本のミュージカルの未来
		10/21	剣幸	女優	舞台は楽し
		11/5	渡辺保	演劇評論家	私の観劇半世紀
	11/19	小田島雄志	としま文化フォーラム塾長	シェイクスピアから見た「父と娘」	
第3期	1/21	春日宏美	女優	よくばりな私	
	2/10	三浦雅士	文芸評論家	芸術とニヒリズム	
	2/18	富士真奈美	女優	もしかしたら幸せ?	
	3/4	徳川義崇	(財)徳川黎明会会長	文化を守る ～徳川義親の足跡をたどって～	
3/18	小田島雄志	としま文化フォーラム塾長	シェイクスピアから見た 今の社会(世の中)		
2009年度	第1期	5/27	手塚 眞	ヴィジュアリスト	日本の表現力 ～手塚治虫のルーツを探る～
		6/10	結城孫三郎	江戸系あやつり人形 結城座・座長	糸でつなぐ江戸～東京 結城座・人形芝居もやま話
		7/1	日比野克彦	アーティスト	[But - a - I]
		7/7	木の実ナナ	女優	人生はショータイム
	7/22	小田島雄志 真琴つばさ 浅井さやか	としま文化フォーラム塾長 女優 ミュージカルクリエイター	天職と道職～作者と演じる者～	
	第2期	1/27	萩尾望都	漫画家	シェイクスピア劇の衣装
		2/3	ジェームス三木	脚本家	ドラマと人生
		2/17	島田歌穂	女優	出会いは人生の宝物
		3/10	隈 研吾	建築家	新しい都市
	3/17	奈良岡朋子	俳優	(演題なし)	
第1期	5/19	上原まり	筑前琵琶奏者	宝塚から琵琶の世界に	
	6/2	柳家花緑	落語家	好きなことを追いかけると道は開ける	
	6/9	大笹吉雄	演劇評論家	日本の演劇について	
	6/30	阿川佐和子	作家	(演題なし)	
7/14	内館牧子	脚本家	大相撲と神		
第2期	10/13	松谷孝征	手塚プロダクション社長	マンガとアニメと手塚治虫	
	10/20	野村 萬	能楽師	狂言の心	
	11/10	鶴山 仁	演出家	私と演劇と	
	11/24	高畑淳子	女優	高畑淳子の“競馬馬”的人生 はじめがあれば終りがある	
12/8	渡辺美佐子	女優			
2010年度	第1期	5/18	篠井英介	俳優	芸術なんていらない?
		5/25	東儀秀樹	雅楽師	雅楽のすごさと音楽のおもしろさ
		6/1	穂谷友子	女優	演じるということ
	6/15	里中満智子	マンガ家	日本の漫画はなぜ世界を制したか	
	6/29	近藤誠一	文化庁長官	文化による日本の再建-都市の役割-	
	7/6	井上道義	指揮者	指揮者たち	
特	9/21	野田秀樹 近藤良平	劇作家・演出家・役者 コンドルズ主宰・振付家	野田秀樹と近藤良平対談 ※台風により2012年5月7日に延期	
特	3/21	朝丘雪路 水落 潔	女優 演劇評論家	朝丘雪路の人と人のコミュニケーション	
2012年度	特	5/7	野田秀樹 近藤良平	劇作家・演出家・役者 コンドルズ主宰・振付家	野田秀樹と近藤良平対談 ※台風により延期開催
	2012年度	9/19	小田島雄志	としま文化フォーラム塾長	シェイクスピアの歴史劇- 「リチャード三世」を中心に
		9/26	工藤恭孝	(株)ジュンク堂書店 代表取締役社長	読書のすすめ
		10/17	小林大輔	アナウンサー、司会者、朗読者	マス・コミからミニ・コミへ 誠実なコミュニケーションとは
		10/24	白石加代子	女優	45年の女優生活を振り返って (小田島塾長との対談)
11/17	中嶋知子	女優	物語の余白(小田島塾長との対談)		

※特=特別講演会

としま文化フォーラム 講師一覧 (敬称略・講師の肩書きは講演当時のものです)

	講演日	講師	講演タイトル	
2004年度	第1期	4/28 福原義春 (社)企業メセナ協議会会長 文化と経済	5/12 森下洋子 バレリーナ バレエと私 (森下洋子氏と対談)	
		山野博大 バレエ評論家	5/26 大友直人 指揮者 日本の音楽、世界の音楽	
		6/9 九世野村万蔵 狂言師 古くて新しい	6/23 小田島雄志 としま文化フォーラム塾長 シェイクスピアから見た「文化・芸術」	
		第2期	9/22 福原義春 (社)企業メセナ協議会会長 文化と経済	9/29 佐久間良子 女優 「映画」「舞台」そして私
			10/13 山本容子 銅版画家 私の美術遊園地	10/27 椎名誠 作家 異文化から再発見する日本
			11/10 小田島雄志 としま文化フォーラム塾長 シェイクスピアから見た「人間」	第3期
	1/26 鳳 蘭 女優 私の女優人生			
	2/9 朝倉 摂 舞台美術家 私の舞台空間			
	2/23 池辺晋一郎 作曲家 音楽が芝居や映像と出会うとき			
	3/9 山田太一 作家 いまの日本の物語			
	3/16 小田島雄志 としま文化フォーラム塾長 シェイクスピアから見た「女性像」			
	特	9/3 ジャン・ルイ・ボナン (仏)ナント市 文化局長 文化でよみがえるフランスの地方都市/ナント市	2/28 安藤忠雄 建築家 可能性をつくる	
2005年度		第1期	5/25 柳家小三治 噺家 (演題なし)	
	6/1 畑中良輔 音楽家 声ってどこからどうやっての?			
	6/8 吉行和子 女優 人と出会う楽しさ			
	6/29 田沼武能 写真家 子供たちに平和を!!			
	7/6 小田島雄志 としま文化フォーラム塾長 シェイクスピアから見た「自分」			
	9/28 福原義春 (社)企業メセナ協議会会長 文化によるまちづくり。～銀座の事例～			
	第2期	10/12 篠山紀信 写真家 写真・デジタル&アナログ	10/26 村松友視 作家 嘘と本当のあいだ	
		11/9 渡辺えり 女優・演出家 歩いてきた道、歩いてゆく道、	11/22 小田島雄志 としま文化フォーラム塾長 シェイクスピアから見た「夢」	
		第3期	1/26 磯村尚徳 外交評論家 日本文化にわくヨーロッパ	
			2/8 竹下景子 女優 (小田島塾長との対談)	
			2/22 池田理代子 劇作家・声楽家 歴史と物語のはざま	
			3/8 三枝成彰 作曲家 西洋音楽の謎を解き明かそう	
3/23 小田島雄志 としま文化フォーラム塾長 シェイクスピアから見た「東」				
特	11/23 初代野村 萬 九世野村万蔵 狂言師 狂言上演「鐘の音」		(都市宣言) 河合隼雄 文化庁長官 文化で日本を元気にしよう	
	2006年度	第1期	5/24 小田島雄志 としま文化フォーラム塾長 シェイクスピアから見た「笑い」	
6/7 天野祐吉 コラムニスト・童話作家 「ことば」について				
6/21 石井好子 歌手 すべて歌にこめて				
7/5 河合隼雄 文化庁長官 現代日本の家族について				
7/19 長友啓典 アートディレクター 日々@好日 Hibi-Kojitu				
9/26 岡村喬生 オペラ歌手 ヒゲタマのダメモト精神				
第2期		10/11 麻実れい 女優 (小田島塾長との対談)	10/25 大岡 信 詩人 私の『コレクション展』の裏ばなし (聞き手:朝日新聞社 佐藤洋子氏)	
		11/8 南 伸坊 イラストレーター 楽しい歴史学習法		
		11/22 小田島雄志 としま文化フォーラム塾長 シェイクスピアから見た「春夏秋冬」		
		第3期	1/24 沢木耕太郎 作家 流儀について	
			2/7 四谷シモン 人形作家 アングラの頃	
			2/21 阿川泰子 歌手 (小田島塾長との対談)	
3/7 高野悦子 岩波ホール総支配人 私のシネマライフ				
3/22 小田島雄志 としま文化フォーラム塾長 シェイクスピアから見た「父と子」				
第1期	9/27 山田洋次 映画監督 演技指導ということ			
	10/11 逢坂 剛 作家 スベイン今昔物語			
	10/25 北川フラム アートディレクター 新しい都市は、美術によって生まれかわる			
	11/8 小田島雄志 としま文化フォーラム塾長 シェイクスピアから見た「知性」			
	11/22 坂東眞理子 昭和女子大学学長 女性の教養と品格 ～人との関わり、出会いを見つめて～			
	1/30 小川甲子 (甲にしき) 東京宝塚劇場支配人 (小田島塾長との対談)			
第2期	2/12 小田島雄志 としま文化フォーラム塾長 シェイクスピアから見た「旅」			
	2/27 澤地久枝 作家 小さな人間のこと			
	3/13 関口照生 写真家 旅からの視点			
	3/26 福地茂雄 東京芸術劇場館長 変化の時代に生きる			
	NHK会長			

としま未来文化財団の 主な事業から

（公財）としま未来文化財団は、区の文化政策の一翼を担い、魅力ある豊島区づくりのため、「文化による地域づくり・人づくり」を目指し、文化芸術事業・地域づくり事業の推進とともに、子どもたちに優れた芸術体験・実践の場を提供するなど、次世代の育成にも努めています。

（文責（公財）としま未来文化財団）

ジュニア・アーツ・アカデミー

小学生を対象とした芸術体験、実践、交流の場

次世代を担う子どもたちを対象とした育成型事業の必要性を認識し、課題としていたとしま未来文化財団では、「区民でつくる演奏会」などの音楽監督、楽団指揮でご協力いただいている東京音楽大学の坂本和彦氏と協議を重ね、2004（平成16）年度、区内小学生を対象とした事業「ジュニア・アーツ・アカデミー」を立ち上げました。

事業の目的は、通う学校や学年の違う子どもたちが、音楽や演劇などの芸術体験を通して、自己表現、自己実現の方法を学びながら交流し、心豊かに成長していくこと、成長に必要なさまざまな

2011（平成23）年度	友好都市・山形県遊佐町の「遊佐町音楽祭」に出演。メンバー31名が坂本先生と遊佐町生涯学習センターのホールで「夢人」を披露。「遊佐町子ども合唱団スマイル・キッズ」と共演
2012（平成24）年度	80周年記念式典&みんなの絆コンサート、オペラ「ヘンゼルとグレーテル」、「区民でつくる演奏会 いっぱい・イッポ・みら・いへVIII」、音楽成人式、としま発新作オペラコミック「君と♡見る夢」に出演

ことを感じてもらおう場をつくり上げることです。年々活動の場を広げ、豊島区内のみならず、区外の地域との交流も盛んに行っていることも、大きな特徴となっています。

2006(平成18)年度「区民でつくる演奏会〜いっぽ・イツポ・み・ら・いへⅡ」(東京芸術劇場ホール、現コンサートホール)では、区の友好都市山形県遊佐町から「遊佐町子ども合唱団スマイル・キッズ」「遊佐混声合唱団」の有志、総勢200名にのほる方々を招へいし、共にオペラの名曲と日本民謡のプログラムを披露しました。また、08(平成20)年度には千葉県君津市で行われた「きみつ夢未来コンサート」に友情出演。その後もこの2地方都市との積極的な交流が続いています。

そして2013(平成25)年3月には、豊島区制施行80周年を記念した新作オペラコミック「君と♡見る夢」で、ジュニア・アーツ・アカデミー卒業生が2人、デビューを果たします。

上手に歌を歌える子ども合唱団、うまい演技ができる子ども劇団を目指すのではなく、多彩な芸術に触れることで、全身で表現できる心豊かな人材を育てたい。その願いがかないつつあるという実感で、事業開始から10年を目前として強くしています。

自分から表現したいという気持ちを育て、感動を分かち合う

としま未来文化財団 坂本和彦・音楽監督インタビュー

「ジュニア・アーツ・アカデミー」誕生のきっかけは、群馬県太田市の「おおた芸術

2007(平成19)年度	区民参加によるアートステージ公演オペラ「ハンセルとグレーテル」に主要な配役として出演、音楽成人式に出演
2008(平成20)年度	区民参加によるアート・ステージ公演オペラ「夕鶴」に出演
2009(平成21)年度	区民参加によるアートステージ公演オペラ「ひかりのゆりかご」に出演
2010(平成22)年度	区民参加によるアートステージ公演オペラ「ハンセルとグレーテル」、足立区立合唱団定期演奏会、東京芸術劇場の「心をつなぐ 夢 そして未来へ」コンサートに出演

【主な公演実績】

学校」^(*)の演奏会を視察して、子どもたちを育成する重要性を強く感じたことに始まります。といっても、私たちが目指したのは、演奏や演技の上手なメンバーを選抜して、オーケストラや合唱団、劇団を運営するということではありませんでした。

もちろん、応募者には、ピアノやバイオリンを習っている子もいます。でも、楽譜が読めなくても音感のいい子はいる。子ども時代、芸術に触れる最初の段階で、できる、できないの優劣にこだわり、仲間同士で壁ができてしまうのは避けたい。みんなで一揃にひとつのことに取り組む楽しさを追求したい。子どもたちが東京芸術劇場でプロのオーケストラや歌手とともにステージに立つという「勇氣」が重要なのです。

6年間活動を続けている子もいますが、基本的には1年ごとに解散、新たに募集する形をとっています。本当にそれをやりたい動機があるかどうか、自分から何を習得するか、どう表現したいのかが大切。自主性のもとに集まっているので、保護者のサポート、連携もうまくいっています。

区内の活動に留まらず、他地域との交流を行っているのも豊島区ならではの特徴ですね。豊島区を広く全国に発信するのに有効ですし、共にステージに立つことができた子どもたちにとっては、大きな財産になるはず。これからも、積極的に交流を進めていきたいと思っています。



※おた芸術学校 群馬県太田市が1996(平成8)年に設立。小中学生を対象に本科(基礎コース)として、オーケストラ、合唱、演劇、リトミック、ソルフェージュ科、本格的な芸術活動を目指す付属オーケストラ、合唱団、劇団がある。

さかもと・かずひこ

東京音楽大学指揮科卒業。1986年「三人の女達の物語」でデビュー。藤原歌劇団、日本オペラ協会を中心とし、数々の公演、多くのオーケストラで客演。2009年11月12日、天皇陛下御即位20年、御成婚50年の慶祝行事にて奉祝曲を指揮。日本オペラ振興会歌手育成部講師および指揮者、東京音楽大学および大学院、同付属高校講師、日本指揮者協会幹事。

目白三人の会

目白を拠点とする舞踊家によるジャンルを超えた舞台

「目白三人の会」は、JR山手線目白駅近くに舞踊スタジオの拠点を置く日本舞踊の花柳千代さん、現代舞踊の美二三枝子さん、クラシックバレエの小林紀子さんという三人の国際的舞踊家により、1984（昭和59）年7月に結成されました。「踊りはすべての人のもの」という趣旨のもと、ジャンルを超えて力を合わせ、地域の方々に踊りを身近に感じてほしいと、それぞれのスタジオを舞台に「目白三人の会」芸術への招待」を上演、草の根の活動を始めたのです。

この動きに注目した豊島区が支援することとなり、1986（昭和61）年9月の公演から、豊島区の主催による第1回舞踊鑑賞講座として、豊島区民センター文化ホールで新たなスタートを切りました。その後、サンシャイン劇場での開催を経て、90（平成2）年の東京芸術劇場のオープンに伴い、同劇場中ホール（現ブレイハウス）へとその舞台を移しました。地域のために始まった活動が、目白から豊島区、さらに東京都全体へと大きな広がりを見せ、感動を呼んでいます。

豊島区が「文化創造都市宣言」を行った2005（平成17）年、同会は「豊島区文化功労表彰」を、さらに07（平成19）年には東京都功労者表彰において、「文化功労」表彰を受けるなど、その業績は区内外で高く評価されています。

また、豊島区の東京都初となる「平成20年文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）」の受賞に大きく



左から小林紀子、美二三枝子、花柳千代の各氏

寄与するとともに、区が目指す「文化と品格を誇れる価値あるまちづくり」の実現の原動力ともなっています。

2010(平成22)年に結成25周年を迎え、ますます充実した円熟味あふれる内容で感動を与えています。

としま能の会

区ゆかりの関係者の協力による魅力あふれる伝統芸

「としま能の会」は1988(昭和63)年、区立東池袋中央公園の仮設舞台で開催された第1回国際演劇祭の開幕を記念し「としま薪能」を上演したことに始まります。能は観世元昭師、狂言は和泉流野村万之丞師(現初世萬)、太鼓、小鼓、笛、地謡、後見等出演者全員が豊島区民でした。96(平成8)年からは会場を東京芸術劇場中ホール(現プレイハウス)に移し、「としま区民芸術祭」と「池袋演劇祭」の皮切り公演として開催されるようになりました。

本企画は、初回から能楽評論家で横浜能楽堂館長である山崎有一郎氏に構成、監修、解説をお願いしています。2012(平成24)年度は能、狂言、舞囃子すべてを祝言演目で構成。さらに、白寿を迎えられた山崎先生が、ご自身で作詞された豊島区を祝った「ことほぎの謡」が披露され、豊島区制施行80周年を盛り上げました。



解説する山崎有一郎氏

一方、区民向けに「能&狂言セミナー」を2009(平成21)年から開催。野村家のご協力により南長崎の「よろづ舞台」をお借りして、野村万蔵氏を講師に、能、狂言の観賞の心得、見所、舞台の裏話などのお話、舞台での所作体験を行っています。熱心でわかりやすい解説が好評で、毎回多くの方が参加しています。

2011(平成23)年には、区内在住、在学の小学生を対象に、狂言にふれ、親しんでもらうワークショップ「子ども狂言教室」を実施しました。夏休み限定の3回コースでしたが、12(平成24)年度は8月から翌年の1月までの8か月間・全11回に拡大し、万蔵、野村扇丞、野村太一郎の各氏にご指導いただきました。1月には国立能楽堂で「萬狂言 ファミリー狂言会」を鑑賞し、3月の「よろづ舞台」での発表会で締めくくります。子どもたちが言葉づかい、発声、立ち居振る舞いをどのように身につけたか、稽古の成果に期待が高まります。

華麗なる彩り

区内の名所、歴史をテーマにした作品も好評

としま区日本舞踊家集団は、豊島区在住の日本舞踊の名取の方々が流派を超えて、1994(平成6)年に結成されました。日本舞踊の振興、発展、普及を目指し、次世代の人材の育成、地域への



としま能の会 公演より
観世流能「石橋」



子ども狂言教室

貢献もその目的としています。

1995(平成7)年からは、日頃の厳しい稽古によって培われた芸を披露する舞台「華麗なる彩り」を開催。「としま区民芸術祭」参加公演として行われ、日本の伝統的な美、日本人の心や奥ゆかしさを華麗に演じ舞い、区民に親しまれています。

2009(平成21)年度には、結成15周年を記念して、「江戸・東京・豊島」人々の息吹」と題する企画作品が上演されました。「いつの時代も、日々の営みを慈しみ、その地に力強く生きる人々の姿を江戸から東京そして」としま未来へ」と描く舞踊絵巻」が観客に大きな感動を与えました。

2010(平成22)年度からは先生方の指導による、区内在住・在学の5歳児から小学校6年生までを対象とした「こども達のためのワークショップ」を開始し、お稽古の成果を本公演で発表しています。さらに、豊島区制施行80周年である2012(平成24)年度は、区内の名所、旧跡をはじめ地域に根ざした文化を披露していただく新作舞踊「豊島巡り名所踊絵」が初演され、好評を博しました。区内の名所や歴史を紹介しながら、色とりどりの風景、風俗、文化が日本舞踊として表現され、豊島区無形民俗文化財の長崎獅子舞と富士元囃子のお祝芸の獅子舞も招いて、記念事業にふさわしい華やかな舞台となりました。また、豊島区セーフコミュニティ認証式典&記念「祝」コンサートには、ワークショップの子どもたちが出演し、外国のお客様からもたくさんの方の拍手をいただきました。こうした取り組みは伝統芸能としての日本舞踊の素晴らしさを堪能していただくだけでなく、ご覧になった方々があらためて地元豊島区への理解と愛着を深める効果につながりました。



セーフコミュニティ認証記念「祝」コンサートより

(写真右) としま区日本舞踊家集団会員の門下生による「舞踊 春の海」

(写真左) 日本舞踊ワークショップ参加の子どもたちがよる「舞踊 さくらさくら」

「(公財)としま未来文化財団の歩み」

昭和60(1985)年4月——財団法人豊島区コミュニティ振興公社発足

昭和62年度——『コミュニティシアター』『美術への誘い』『としまコミュニティまつり』始まる

昭和63年度——『区民参加オペラ』スタート

平成元年度——財団法人豊島区街づくり公社発足。『としま新能』『民俗芸能inとしま』『区民がつくる第九演奏会』スタート

平成2年度——豊島区と共催で『としま区民芸術祭』スタート

平成3年度——『としま史跡探訪シリーズ』発行、公社設立5周年記念誌『5年のあゆみ』発行

平成4年度——『としま寄席』スタート

平成6年度——区制施行60周年記念事業『としま歌舞伎』開催、『豊島公会堂の40年』発行

平成14年度——区制施行70周年記念事業 区民の歌発表 さだまさし作曲「としま未来へ」『豊島公会堂の50年』発行、辻村

平成16年度——寿三郎脚本・演出・出演の人情芝居「化鳥」公演

平成17年度——「としま文化フォーラム」、ジュニア・アーツ・アカデミー事業スタート

平成18年度——財団法人としま未来文化財団発足(旧財団法人豊島区街づくり公社と統合) 指定管理者制度スタート

平成19年度——【豊島区民センター、豊島公会堂、地域文化創造館(駒込・巣鴨・南大塚・雑司が谷・千早、勤労福祉会館の管理運営) および東京芸術劇場を中心とした芸術事業、コンサート等の開催

平成20年度——豊島区立舞台芸術交流センター(あうるすぽっと)のオープン。※オープニングセレモニー「三番叟(狂言師：野村萬、

※柿渚とし公演「ハロルド&モード」「駅・ターミナル」「海と日傘」「朱雀家の滅亡」

平成21年度——「池袋演劇祭」20周年記念事業 ジェームス三木作・演出「池袋わが町」公演、区民がつくる演奏会

平成22年度——「ゲルディ レクイエム」ワリスト・錦織健 合唱250名、各地域文化創造館、勤労福祉会館の再度指定管理者に

新財団設立5周年記念事業「池袋わが町」再演と友好都市(山形県遊佐町、長野県箕輪町、三重県桑名市)での巡回公演、

岐阜発新オペラ「ひかりのゆりかご」公演、平成20年度文化庁長官表彰受賞記念「フェスティバルコンサート」

公演、あうるすぽっと「にゅく盆踊り」、南大塚地域文化創造館「つかコレ2009 ファッションショー」等

平成23年度——豊島区民センター、豊島公会堂、勤労福祉会館が再度指定管理者

「雑司が谷 案内処」オープン、あうるすぽっとチエーホフフェスティバル2010、「目白三人の会」25周年記念

公演、財団設立25周年記念公演「ありがとう 感謝で紡ぐコンサート」心でつながる 夢 そして未来へ」開催

平成24年度——公益財団法人へ移行

区制施行80周年記念事業『君と♡見る夢』公演、豊島公会堂開館60周年記念『立川志の輔独演会』

【管理・運営してきた施設(昭和60年〜平成16年度)】

豊島公会堂、豊島区民センター、勤労福祉会館、駒込南大塚、千早の各社会教育会館、青年館、豊島、巣鴨、西巣鴨の各体育館、総合体育館、豊島プール、荒川野球場、雑司が谷社会教育会館、雑司が谷体育館、巣鴨社会教育会館、西池袋温水プール、三芳グラウンド

区内大学との連携・協働

―学長・総長メッセージ

2007(平成19)年11月19日、豊島区は区内6大学(学習院大学、女子栄養大学、大正大学、帝京平成大学、東京音楽大学、立教大学)と、「豊島区と区内大学との連携・協働に関する包括協定」を締結しました。これは「街全体をキャンパスに！」を合い言葉に、それぞれの人的、知的、物的資源の交流を図り、教育機能の向上と、豊かな地域社会の創造を目指して連携・協働することを定めたものです。

中心となる事業のひとつに「としまコミュニティ大学」があります。学びを通じて人と人がつながり、活動へとつながり、いきいきとした地域社会づくりにつながる「地域自治力」を培う場とし、地域課題を認識して地域を変えていく人材を育成していくことを目指しており、各大学の教室や生涯学習センターを会場に、特色を生かした年間延べ60〜70の講座が開かれています(※1)。

協定の更新年にあたる2009(平成22)年11月に開催された6大学の学長、総長による懇談会(※2)では、「大学相互の連携も図るべき」「学内での周知が必要」「行政から大学への区民ニーズ把握の方法を検討してほしい」「災害時等、危機管理面での連携・協働体制を確立すべき」など、さまざまな意見交換が行われ、今後のさらなる連携・協働に向けて、新たな歩みをスタートさせています。

区制施行80周年にあたり、各大学よりメッセージをいただきましたのでご紹介します。



※1

「健康科学」「コミュニケーション」「ライフデザイン」「地域」という4つのジャンルに分類され、第一線の研究者、専門家が講座を担当。誰でもいつからでも参加が可能。

※2

懇談会は協定締結日の前後に毎年行っている。

Kagawa Nutrition University

「命のインフラ」＝ 食の大切さを地域に伝えたい

女子栄養大学学長 香川芳子

本学園は平成25年で創立80周年を迎えます。豊島区には昭和17年頃、小石川区の大和郷から移転してまいりました。昭和8年、当時多かった脚氣の原因が、ビタミンB1の欠乏、具体的には白米の偏食という食生活によること、胚芽米で予防・治療ができることがわかりました。その研究に従事した東京大学医学部島園内科の医師夫妻が、食生活の改善・普及を目指して建学した、栄養学を中心とした専門大学です。

四年制大学・大学院は、昭和35年以来坂戸市に移りました。現在、豊島区駒込には学生の通学の利便性から学部二部、短期大学部、そしてお料理やお菓子作りの専門学校があります。地域の方々とは大変親しくさせていただいており、今後の発展を期待しています。本学の目標は健康と食生活の研究と普及であり、大学・短大・専門学校のほかにも通信教育や月刊「栄養と料理」(1935年創刊)や多くの本の発行などを手がけ、皆様の健康を支える食生活の普及を図っております。

豊島区の皆様にも、ささやかにとしまコミュニティ大学や小学校などで食育のお手伝いをさせていただいています。小さな大学の狭い分野ですが、食事は万人の日々の営み、1人でも多くの方の健康と幸せのために努めております。専門学校の教育のために開設している松柏軒も地域の方々や学会などのお集まりで重宝されているようです。

現在も多くの方々食生活に起因する糖尿病などの生活習慣病に悩んでいます。豊かになった食生活に、ただ美味しさや便利さばかり求めた結果です。日常茶飯事と申しますが、日々の食はどうしても必要ですし、食が生命に拘わることもあります。皆様には、食を命のインフラとしてご認識いただき、ときには本学園にもお越しいただくことで地域ぐるみで幸せになるお手伝いができるものと考えております。



Gakushuin University

豊島区と区内6大学連携の 持続発展のために

学習院大学長 福井憲彦

豊島区内6大学と豊島区との連携・協働に関する包括協定が結ばれて、2012年秋で満5年になりました。としまコミュニティ大学の講座開設はもちろん、それ以外の多様な連携活動も、協定によってしっかりと枠組を与えられた意味は大きいと思います。変動の激しい現代世界のなかで、心豊かな地域の生活を持続させるには、経済基盤・社会基盤の整備はもとよりですが、文化をしっかりと根づかせることは基本です。他方、高度な研究と教育を遂行している大学は、究極の非営利法人といえます。

本学は幸いにして区内随一の緑を維持してきましたが、そういった環境保全や災害対応における貢献だけでなく、内部に蓄積されてきた多様な資源を社会に提供・還元することは大学の重要な責務であります。区内小中学校への教育補助学生の派遣や、区内外国人のための日本語教室開催は、教育委員会とも連携して長年継続してきました。

こうした地域社会とのかかわりは、それに携わった学生たちの成長にも大いに助けとなっています。それ自体が、重要な教育機会をなしているともいえるでしょう。お互いが相乗効果でプラスを実現できる、というのが、連携・協働が持続するための鍵になります。各大学では市民に公開された講演会などの活動をいろいろ組織しています。学習院大学でも、史料館や東洋文化研究所が開催する定例講座をはじめ各種のものがあります。情報面での区との連携も密にしていこうではありませんか。



区民の皆様と健康で 安心できるまちづくりをめざして

帝京平成大学学長 沖永寛子

帝京平成大学は2008年に新しく池袋キャンパスを開校し、2012年度で5年目を迎えました。池袋キャンパス開校と同時に、豊島区内6大学との連携・協働に関する包括協定を締結し、豊島区の「文化」によるまちづくりに連携することとなり、以来5年間着実に区内の活動を展開させていただき、高野区長をはじめ関係者の皆様にも感謝しております。

としまコミュニティ大学では、本学の医療系の分野を特徴とした公開講座を実施しており、死亡原因の第1位である「がん」についての講座、災害時を中心とした「救急救命」についての講座、「介護予防」の講座、「メンタルヘルス」に関する講座など、毎シリーズでテーマを決めて講座を複数回実施し、区民の皆様への情報発信をしてきました。毎回多くの区民の皆様にご受講いただき、受講された皆様からは、活発な質問をいただき、健康や医療に関する関心の高さを感じるとともに、大学として社会に情報発信できることの重要性を実感しているところであります。

また、池袋キャンパスには接骨院、鍼灸院、臨床心理センターがあり、区民の皆様にご利用いただいています。これらの施設においても新たな取り組みとして、介護予防体操（ロコモ体操）、漢方薬を取り入れた東洋医学的な治療などを行っており、通院されている皆様にご健康で安心できる地域づくりを提供していく所存であります。

豊島区東池袋の地に本学が新しいキャンパスを構えたことが本学にとっても大きな転機になっていることは確かであり、教員、学生、そして地域社会との連携の点においてもこれまで以上に活発な活動が行われています。これらの活動を生かし、発展させ、今後も豊島区との連携をさらに深め、区民の皆様にご認識していただけるような大学づくりに取り組んで参りたいと考えています。



こころ豊かな 豊島区づくりのために

大正大学学長 多田孝文

大正大学は「智慧と慈悲の実践」を建学の理念とし、人類の福祉に貢献する人材を養成する平成28年度に創立90周年を迎える仏教系大学です。すでに40年前から、豊島区教育委員会のもと、仏教文化・学術・歴史資料に基づいた市民大学のさきがけとして公開講座を開講、「共生」の理念のもと、地域社会とともに発展するための地域における諸活動を行っており、学生もその活動の中で成長させていただいております。

こうした歴史的経緯を経て、近年、としまコミュニティ大学では仏教や歴史関連の講座のみならず、地域社会の福祉課題等の講座を展開してまいりました。また、「にしすがも友遊まつり」「江戸の花さくらソウフェア」「天祖神社祭礼」等では教職員・学生も参加させていただき、地域との文化交流を深めています。さらに、区制80周年記念事業PR映像作成においては放送・映像表現コースの学生がお手伝いをさせていただきました。夏には「鴨台みたま祭り」（盆踊り）、「光とことばのフェスティバル」（表現学部1年生作成のねぶたの光のオブジェ）も実施し、多くの方にご来場いただきました。

2012年4月には、社会貢献・地域連携を専門とする新組織・鴨台プロジェクトセンターを発足し、さらなる地域との交流を図っているところであります。2013年5月には旧中山道通りに面して、本学の建学理念である仏教精神を具現化した「すがも鴨台観音堂」（さざえ堂）を完成させ、皆さまに安らぎと楽しさの場を公開します。完成の暁には是非、多くの方のご来場をお待ちしております。

大正大学は、これからも、こころ豊かな文化的な豊島区づくりのために皆様とともに成長していきたいと存じます。今後ともよろしくお願いいたします。



知と文化の発信地へ

立教大学総長 吉岡知哉

1874年、ウィリアムズ主教によって築地に作られた小さな私塾を起源とする立教大学は、1918年、当時はまだ武蔵野の面影を残す池袋に移転してきました。立教通りから正門を入ると右にチャペル、左に図書館、モリス館のアーケードをくぐると左右にかつての学生寮、正面に学生食堂という、赤煉瓦の校舎群が作り出す光景は当時と変わることがありません。

この1世紀の間、立教生は池袋という地で育ってきました。地域社会は大学にとって、豊かな学びの場であると同時に、教育・研究の成果を還元し検証する場でもあります。その意味でも、豊島区が「文化創造都市」として推進する「文化によるまちづくり」は、大変意義深いものと考えています。

池袋キャンパスでは、地域の方々に開かれた公開講演会やシンポジウムを毎年約200回ほど開催していますが、豊島区との連携は、理数教育連携による小中学校の理科教材の開発や、豊島子ども大学の開講、としまコミュニティ大学でのシニア向けの講座の展開など、世代を超えた多様な学びの場を生み出しています。また、地元のアートイベントである「新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館」の企画と運営、池袋西口公園の社会実験・緑のアートカフェなどには、多くの学生が、地元のNPOや商店街・町会の方々とともに関わっています。

昨年には東京芸術劇場との間で連携・交流協定を締結しました。池袋西口から劇場広場、そして立教大学へと広がる地域を、歴史と伝統をふまえた最先端の知と文化の発信地として発展させてゆきたいと考えています。



音楽による地域連携の 継続と発展を

東京音楽大学学長 野島健

文化庁より「文化芸術創造都市」として表彰され、文化政策に力を入れている豊島区にあって、その追い風に乗せていただき、東京音楽大学は本学の使命である音楽による地域連携を進め、今後も継続的に発展させてゆきたいと考えております。

大正13年、本学は関東大震災による校舎焼失により、神田裏猿楽町からこの雑司が谷地区に移ってまいりましたが、この地域は高度経済成長期のころ、池袋駅に近い部分が「南池袋」とその町名が変わり、今日に至っております。区制80周年メッセージの中で高野区長が「古き良きものと新しいものを融合させ」と語っておられたように、豊島区により鬼子母神の参道に案内処を配置するなど、古き良き「雑司が谷」に再び光が当てられるようになりましたことは、本学にとっても大変うれしいことであります。

現在、区内の区民ひろばを順番に巡る「区民ひろば回遊音楽キャラバン」が本学の学生音楽隊によって展開中ですが、こうしたイベントを通じて地域と本学との絆がより深まりますことを願い、また、2015年には新しい豊島区庁舎が本学に近い南池袋2丁目に完成いたしますこともおおいに楽しみにしております。2013年の春には副都心線が横浜まで繋がるとのこと。本学の学生にとっても、魅力ある雑司が谷であり、池袋であり、そして豊島区であり、音楽大学であり続けたいと願っております。



まちづくり等との連携による文化政策の推進

都市の文化は、区民や来街者との双方向的な交流の中で醸成され、そのことがさらに新たな文化的魅力に発展するという性質をもっています。都市に関わる人々が、文化的・創造的な交流によって区内の文化資源を活かした多様な活動を展開し、まちづくりへと発展させていきます。ここではその主なものを紹介します。

としまアートステーション構想

としまアートステーション構想とは、「豊島区文化政策推進プラン」のシンボルプロジェクト「新たな創造の場づくり」の一環として、2011（平成23）年度から始まった文化施策です。豊島区民をはじめ、アーティスト、NPO、学生など多様な人々が、区内各地域のさまざまな場所で、自主的・自発的にまちなかにある地域資源を活用したアート活動の展開を可能にする「環境システムの構築」と「コミュニティの促進」を目指しています。

豊島区と東京都、東京文化発信プロジェクト室（公財）東京都歴史文化財団）、NPO法人アートネットワーク・ジャパン（ANJ）の四者の主催により実施しています。また、東京文化発信プロジ



◎ としまアートステーション構想

※1

東京アートポイント計画とは東京のさまざまな人・まち・活動をアートで結び、とて、東京の多様な魅力と地域・市民の参画により創造・発信することを目指し「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と（公財）東京都歴史文化財団が展開している事業。まちなかの地域資源をアートで結び、まちの魅力を創造・発信する「エリア型プロジ

エクト室が行う「東京アートポイント計画」の一つにもなっています。

美術館や劇場といった文化施設は、これまで、作品を観るための場所と位置づけられてきました。その後、ワークシヨップという手法が生まれ、定着しました。しかし、文化施設が提供する事業において、区民が主体的に「自分のこと」として関わるには、ある種の限界があるのも事実です。これからの「文化事業」は、自主的・自発的に個人が活動をはじめ、それを支援するシステムの構築が大切ではないか、それによりコミュニティ形成が促進されることを目指して、この事業はスタートしています。

この構想では、豊島区で生まれる自主的なアート活動を支援していくために、「アートプロジェクト」(P101参照)と「アートサポート」という2つの取り組みを行っています。「アートサポート」には、豊島区民の自発的なアイデアに対して相談を受け、区内の人と人、人と街をつないでいく「アートコンシェルジュ」や、ゆるやかな勉強会「Zの会」などがあります。「Zの会」は、「地域」「アート」「場づくり」などをキーワードに、さまざまなジャンルで活躍する方々をゲストに招いて開催しています。また、としまアートステーション「Z」^(※2)では、地域に住む人びとやアーティストが集い、情報交換や交流が行われています。

ラム)、教育・防災・産業・環境・福祉などの各分野と協働しながら、まちづくりに関わる活動を推進する「複合型プログラム」、都内各地で人・まち・活動をアートで結び、アートポイントをまちなかにつくり出していく人材を育成する「人材育成」、アートプログラムの担い手が実際に活動を行う上で活用することのできる、社会的に必要なとされている仕組みを構築する「ソーシャル・プラットフォーム」という相互に関連するプログラム等を展開し、東京のまちなかに文化創造拠点「アートポイント」をつくり出していく。

<http://bn-project.jp/arpoint>

※2

としまアートステーション「Z」

雑司が谷にある千登世橋教育文化センター内の元カフェスペースを、としまアートステーション構想の拠点

としまアートステーション構想の参加アーティストのひとり、藤浩志さんは、アート活動に関わるさまざまな人たちを「土・水・風」という言葉にたとえています。「土」は、その場所にしっかりと根付いた地域の人たち。養分を与え、育み、発酵させます。「風」は、その場所に一時的に現れ、新しいものごとをもたらすアーティストたち。アイデアや情報などの種を運びます。そして、「水」は、興味や関心を引き起こし、それらの関係をつなぐ人たちです。豊島区内には「土」と呼ぶことのできる人や場所が、あちこちにあります。この構想のひとつ目の役割は、その「土」へ、アーティストが行うアートプロジェクトとして「風」を送り込むこと、もうひとつの役割が、「水」となっておりこれらをつなぎ合わせていくことです。

主体的に文化活動に関わることができ環境を用意することで、区内のいたるところに「としまアートステーション」が生まれ、「人と人」「人と街」の間に強く暖かい絆が生まれることを期待しています。そのゴールがどのようなものとなるのか、模索を続けながら進んでいる実験的な試みです。3・11以降の社会では、こうした公共活動のあり方があらためて問われていると感じます。用意された公共から主体性のある公共へ。としまアートステーション構想は、そんな「自分ごと」の公共文化事業なのです。(談)

として活用している。スタッフの集う場であり、区民とアーティストの情報交換・交流の拠点、「ミニエティカフェ」の機能を持ち人の相談窓口など、より多くの区民を巻き込むことのできる開かれた場になることを目指している。

「所在地」豊島区雑司が谷3-1-7 千登世橋教育文化センターB1F

さとう・しんや

1968年東京生まれ。日本大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。博士(工学)一級建築士。としまアートステーション構想「ディレクター」3331 Arts OnYoda3改修工事も手がける。

【アートプロジェクト一覧】

「Miracle Waterをつくる。」 藤浩志 (美術家)

2011年

地域にあるジャンルを超えた面白い活動の種をリサーチし、興味という養分を注ぎ、実際の活動へとつなげることをサポートするクリエイティブチームを結成。「モコモコラボ」では、来場者とともにぬいぐるみ素材の活用法を考えた。

「虫をつくるワークショップ」 ひびのこづえ (コスチューム・アーティスト)

2012年

舞台衣裳などに使われた布のはぎれで、参加者とともに“虫”をモチーフにしたブローチをつくるワークショップ。恒常的に行うことで、参加者同士の関係性を生み出すことを意図している。

「TAbLe」 岸井大輔 (劇作家)

2012年

2012年4月から劇作の準備として豊島区で調査散歩を行ったところ、豊島区には独特で多種多様なコミュニティや活動が数多くあるが互いの交流がほとんどないと気付き、「豊島区 (Toshima) の可能性 (Able) を共に考える場所」TAbLeをつくりたいと考えるように。9月1日～11月15日、地理的・文化的・歴史的・行政的に様々な界が入り組んだ豊島区の界に岸井とリサーチメンバーが日々通い、「分裂 (diVISION) の状態」を調査・観察。その調査報告として2013年1月15日～2月14日に「豊島区界」を開催した。アート・歴史学・地理学などの異なる分野から区界を考える勉強会、調査の現場を巡る散歩、界を越えて活動している方との対話、その他、調査資料を集約し展示する企画など。

「としまで子育て」 阿部初美 (演出家)

2012年

演劇的手法を用いて、子育てという社会的課題を参加者とともに考える場を生み出した。浮かび上がってきたのは、それぞれの時代における「生き方」、世代間ギャップとコミュニケーションの断絶。20代から60代までのワークショップ参加者による「人生における結婚・出産・子育てをどう考えているか」のインタビュー映像を発表し、それぞれの世代が何を考えているかを対話した。

「L AND PARK」 L PACK (カフェユニット)

2011～2012年

ゆるやかな出来事を通して、公共的な場のあり方について考えるきっかけをつくり出す。

「ポットラックパーティーとしま」 EAT & ART TARO (アーティスト)

2011年

設定したテーマに沿って飲食店や商店から食品を買い参加者たちが語り合う、持ち寄り制の“食からまちを見直す”パーティー。

「キッチンプロジェクト」 EAT&ART TARO (アーティスト)、中山晴奈 (フードデザイナー)

2011年

食とアートをキーワードに、人と人、人とまちがつながる、キッチンを活用したプロジェクトを展開。

写真右から「Miracle Water
をへる」「TAbLe」「ポ
ットラックパーティー」



© としまアーティスト・構想

文化行政先進区の豊島区と東京都だからできること

森司 東京アートポイント計画ディレクターインタビュー

「東京アートポイント計画」は、新しい公共であるNPOが文化事業を行う際の後方支援の役割を担っています。協働する中で、イベントを打つチームではなく、常態として活動しているチームを都内各所に整備する、というイメージです。

都市には、膨大な生産者と膨大な消費者がいても、「当事者」が少ない。その当事者をつくらうというプロジェクトであり、それが結果的に地域コミュニティの構築につながったり、地域が住みやすく安全な場所になっていくことを目指しています。といっても、コミュニティデザインではなく、アートプロジェクトとして行うというフレームです。

私たちは集客目的のイベントをやるというよりは、あくまで、まちと関わるためのプロジェクトをつくり、その担い手に誰もがなれること、そのスキルを勉強できるようにしたい。その人その人にとっての等身大のプロジェクトが継続的にできるようになり、チームリーダーが連携して束になれば、もっと大きなプロジェクトができるようになる。その仕組みづくりをしているのです。ですから具体的な活動が見えにくいし、大きな成果にたどり着くにはもう少し時間がかかるでしょう。

豊島区の場合は、これだけの大きなまちで、人々の流動性も高いなか、どのような装置やシステムがあれば「まちデビュー」、すなわち地域のネットワークに入っていけるのかがポイントとなります。豊島区がすばらしいのは、文化行政でいえばトップランナーであり、このまま施策を押し進めるだけで、何ら問題はないところを、あえて「その先」を目指し、チャレンジし続けているということです。としまアートステーション構想を、新しい事業として生み育てようとしている。区が文化政策に力を入れてきたことよって、職員の意識が高まっている。それが豊島区の財産なのではないでしょうか。これが、10年間の蓄積であり、成果だと思います。

時代の空気は今、目まぐるしく変わっています。そんな時代に、スモールバジェットでできる自発的な活動、お金をかけず工夫をして楽しむライフスタイルを切りひらき、ネットワーク化していくことがますます求められるでしょう。シェアオフィス、シェアハウス、シェアワーキングなど、シェアという概念をもつ人たちが数年もすると増えてくる。そうすると、としまアートステーション構想の論理はそれほど違和感がないことになると思います。シェアとネットワークという感覚を当たり前にもっている人たちが、まちの中の新しい活動をしようという時にとしまアートステーション構想と出会ってくれることを期待しています。

3年目を迎える2013(平成25)年度は、この活動をもう少し「見える」ものにし、検証し、さらに進めていこうとしています。

もりつかさ

1960年愛知県生まれ。
(公財)東京都歴史文化財
団東京文化発信プロジェクト
室地域文化交流推進担
当課長。水戸芸術館現代
美術センター学芸員を経て、
2009年「東京アートボ
イント計画」の立ち上げか
ら関わり、ディレクターと
してNPO等と協働した
アートプロジェクトの企画
運営、人材育成プログラム
を手がける。

豊島区ゆかりのマンガ文化の発信事業

マンガ・アニメをめぐる「むかし」と「いま」が交錯する豊島区

海外で「クールジャパン」として高い評価を受けている日本のマンガ・アニメ文化。多くの作品が世界各国で翻訳・放送・上映されて人気を集めています。また、国内においても、マンガ家の人生を取り上げたドラマや映画、舞台などが話題になったり、作品の舞台を訪れる「聖地巡礼」も盛んで、全国でマンガやアニメを活用したまちおこしが活況を呈しています。

豊島区は、戦後の混乱がまだ残る昭和20年代後半からマンガ作品の創作拠点となった地でした。大日本雄弁会講談社の子ども向け雑誌『少年倶楽部』に「冒険ダン吉」を連載「1933（昭和8）年6月号〜39（昭和14）年7月号」し、人気マンガ家となった島田啓三主宰の「東京児童漫画会」^{※2}が池袋周辺で発足したこともあり、新旧マンガ家たちが多く集いました。その後継となる「日本児童漫画会」には、南長崎地域にあったトキワ荘ゆかりのマンガ家である手塚治虫をはじめ、石ノ森章太郎、赤塚不二夫、藤子不二雄^{※1}、藤子・F・不二雄らが参加していました。

また、千早地域には『鉄人28号』『魔法使いサリー』で知られる横山光輝が居住、さらに手塚治虫は区内の雑司が谷に仕事場を移し、創作活動を続けていました。

そして今、池袋は秋葉原、中野ブロードウェイなどと並ぶマンガ・アニメファンのメッカとして賑わっています。特に、サンシャイン60の西側には、女性を対象としたアニメグッズや同人誌を扱

※1

1957（昭和27）年椎名町5丁目2253番地（現・南長崎三丁目）に建てられたアパート。名前の由来は当時の大家・天野和喜次（とぎじ）氏の名前にちなんだものという。翌年、児童マンガ雑誌「漫画少年」を発行していた学童社の編集者・加藤宏泰が入居したことから、手塚治虫をはじめ、多くのマンガ家が入居。82（昭和52）年、建物の老朽化によって解体され、その後改築された建物も2000（平成12）年に取り壊しとなり、跡地には日本加除出版株式会社の社屋が建っている。

※2

東京児童漫画会
1951（昭和26）年頃に島田啓三氏の提案で発足したマンガ家による同人団体。児童長屋と称しマンガ催事の企画などを行った。1959（昭和34）年日本児童漫画会に改名。

う店舗が集積し、「乙女ロード」と呼ばれひとつのカルチャーを形成しています。

「トキワ荘」関連のプロジェクトが活発化

豊島区では、これまで豊島区立郷土資料館でトキワ荘に関連する展覧会を3回開催^{※3}し、中央図書館にトキワ荘関連の書籍を集めた特設コーナーを設置、2008(平成20)年からトキワ荘のあった南長崎三丁目周辺地域と協働事業を実施するなど、トキワ荘の文化を継承する事業を展開してきました。

2009(平成21)年4月、豊島区立南長崎花咲公園に、記念碑「トキワ荘のヒーローたち」が建立されました。これは、地域が実行委員会を立ち上げ、豊島区文化観光課とデザインや設置に関する検討を重ね実現したものです。これが母体となつて、同年10月の郷土資料館での企画展「トキワ荘のヒーローたち〜マンガにかけた青春」開催時には、「トキワ荘通り・協働プロジェクト」として、ワークシヨップやスタンプリー、オリジナルグッズの制作販売が行われました^{※4}。翌10(平成22)年8月には、目白二又通り商店会と南長崎ニコニコ商店街がガイドブック「トキワ荘通り」を刊行¹²(平成24)年4月には「トキワ荘」の跡地である日本加除出版株式会社の敷地内にモニユメントが設置されました。そして13(平成25)年度には、観光客のための「お休み処」を設置し、トキワ荘のジオラマを展示する予定です^{※5}。

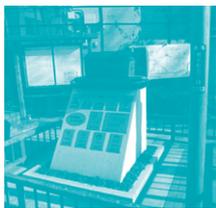
※3

1986(昭和61)年、98(平成10)年、09(平成21)年

※4

この時初めて、赤塚不二夫が暮らしたトキワ荘近くのアパート「紫雲荘」が特別公開された。

記念碑「トキワ荘のヒーローたち」(写真右)。トキワ荘跡地に設置されたモニユメント(写真左)



紫雲荘・活用プロジェクト トキワ荘のスピリットを受け継ぐ

「トキワ荘通り協働プロジェクト」の一環として2011(平成23)年6月からスタートしたのが、「紫雲荘・活用プロジェクト」です。紫雲荘はトキワ荘の斜め向かいに位置する築54年の木造二階建てアパート。売れっ子になった赤塚不二夫が、トキワ荘だけでは手狭となり、仕事場兼寝室として借りたもので、今も現存します。この2階部分の部屋を、マンガ家を目指す若者に一部家賃を補助して貸し出し、まちぐるみで応援しようとして、全国から入居者を募集。現在は面接で選抜された、漫画家を目指している福田健太郎さんと枝作さん(ペンネーム)、先に住んでいたプロの漫画家・桐木憲一さんの三人がひとつ屋根の下で創作活動を行っています。

紫雲荘を訪ねると郵便受けには「赤塚」の文字。2、3カ月に一度、不定期で行われる紫雲荘ワークショップの開催時にのみ、当時を再現した赤塚不二夫の居室が一般公開されます。ワークショップは、プロジェクトの活動に賛同したマンガ家の先生方のお話を間近で伺える貴重な機会となっています。

家主の大山朱実さんは「このアパートは97歳で亡くなった母の遺言で、ずっと残すように言われていました。小さな時から、赤塚さんのエピソードを聞いて育ちました。ここを活かすことができればと、プロジェクトに参加しました。このまちには、頑張る人を支える空気があります。効率化された社会の中でぽっと空いた場所というか、プロの方もここに来ると、原点に戻るとおっしゃっています。ここで、世代を超えた交流があるといいですね」と語ってくれました。



今も当時の面影を残す紫雲荘の外観と、家主の大山朱実さん

※5
ジオラ制作費や資料収集費には、ふるさと納税制度を活用した寄付によるマンガ基金でまかなう

地域がつながり、世代がつながり、輪が広がる

マンガ家・「トキワ荘通り協働プロジェクト」スタッフ 桐木憲一さんインタビュー

「週刊漫画ゴラク」（日本文芸社）に連載中の「東京シャッターガール」で「トキワ荘通り」を取り上げることになり、取材がきっかけで「トキワ荘通り協働プロジェクト協議会」事務局長の小出幹雄さんと知り合い、マンガ家としてアドバイスできることがあればと活動に参加しました。紫雲荘・活用プロジェクトの話聞き、「住んだほうが早い」と思って引越してきたんです。集英社の赤塚不二夫賞でデビューをしていますので、これも縁なのだと思います。

住んでみたら、都会の真ん中にもかかわらず、レトロな雰囲気と人情が残っている。本当に面白い場所だと思いましたし、何かできそう、と感じました。

プロジェクトでは、この1年半の間ワークショップを重ねるうち、老若男女、地域外からも人が集まって、輪が大きくなりました。さまざまジャンルクリエイターが、ひとりではできないこと、集まることで何かができるのではないかと感じ、可能性を探している。ここから、新しいことが始まるとみんなわくわくしています。

やはり、トキワ荘という象徴的な存在があるからこそですね。当時、ここから生まれる作品をリアルタイムで読んでいた第二世代のマンガ家の先生方が、話をしたいと言ってくださいます。たとえば『キン肉マン』のゆでたまご（嶋田隆司）先生もそのお一人。僕たちは夢中で『キ

きりき・けんいち

マンガ家、「トキワ荘通り協働プロジェクト」スタッフ。1976年山口県生まれ。91年、「ななせ君のハカ」で「週刊少年ジャンプ」ホップ☆ステップ賞入選。「週刊漫画ゴラク」で「東京シャッターガール」を連載中。



ン肉マン』を読んでいた世代ですから、夢のようです。

今後も、トキワ荘関連のプロジェクトに参加していきたいです。すぐに無理かもしれませんが、変わりゆくまちの姿や僕たちの活動を、マンガで残せたら……。いずれ現代の『紫雲荘物語』が誕生するかもしれません。

〴〵マンガの鉄人〴〵 横山光輝と豊島区の関わり

子供向けマンガの「鉄人28号」から中国古典文学を題材とした「三国志」に至

るまで幅広い世代に作品が読まれている横山光輝は、1960(昭和35)年に千早に居を構えて以降、69歳で亡くなるまでの45年間、豊島区に居住し、作品をつくり続けました。より多くの方々に横山作品に接してほしいという(株)光プロダクションの協力により、豊島区立千早図書館では、著作マンガの貸出・閲覧のほか、特設コーナーには代表作のレプリカや玩具が展示されています。また、12(平成24)年には豊島区制施行80周年を記念して、「魔法使いサリー」「バビル2世」「仮面の忍者赤影」の主人公たちに特別住民票が発行されました。

雑司が谷・並木ハウス近くに「雑司が谷案内処」を開設

雑司が谷エリアの魅力を発信していくために区が開設した観光案内所「雑司が谷案内処」。鬼子母神参道に面した「並木ハウスアネックス(別館)」(※6)の一部を豊島区が借り上げたものです。手塚治



豊島区立千早図書館に展示されている高さ1.93メートルの「鉄人28号」



横山光輝作品・特別住民票1部400円(税込)。オリジナルクリアファイルつき

虫氏がトキワ荘から移り住んだ「並木ハウス」は、この横の脇道を入ったところにあります。並木ハウスは1953(昭和28)年竣工の木造モルタル2階建てのアパート。今も現役で10世帯が暮らしています(見学不可)。



手塚氏は54(昭和29)年から3年間をここで過ごし、「鉄腕アトム」「リボンの騎士」「火の鳥」が生まれました。鬼子母神散策の折には、ぜひ訪れたい「聖地」です。

アニメイト池袋本店がリニューアルオープン

2012(平成24)年11月17日、池袋「乙女ロード」の中核をなすアニメグッズ店アニメイト池袋本店が豊島区役所本庁舎のすぐそばに移転・リニューアルオープンしました。2階にはラジオ収録ができるスタジオが常設され、9階にはアニメ系インスタイメントができるスペースとしては関東で最大級のアニメイトホールが設置されるなど、より一層「発信」に力を入れているのが特徴です。株式会社アニメイト代表取締役会長の高橋豊氏は「新しい店舗では皆様に楽しんでいただける仕掛けがいろいろとあります。店舗の周辺が笑顔であふれる通りになるとうれしい。トキワ荘などに代表される豊島区の文化を次の世代へつなげていくこともとても大事。一企業として地域の発展やにぎわいの創出にご協力したい」と今後の意気込みを語っています。

雑司が谷の鬼子母神周辺地域の商店会とマンガ文化によるまちづくりに取り組むNPO法人が主体となった制作実行委員会によるMAP

※6

並木ハウス別館は1933(昭和8)年の建築。東京文化教材社という模型飛行機の会社の工場だった

「雑司が谷案内処」。2階にはギャラリーも。

開館時間：10時30分～16時30分

休館日：毎週木曜日(ただし祝日の場合は開館)、年末



おおつか音楽祭

生の音楽に触れることで人と人のつながりを

2009(平成21)年からスタートした「おおつか音楽祭」は、JR大塚駅近くの大塚駅南口盛和会、大塚商興会、サンモール大塚商店街振興組合の3つの商店街の青年部メンバーが中心となって結成された「南大塚ネットワーク」の活動から生まれました。*

大塚には20数カ所もの音楽ライブのお店やスタジオがあり、ミュージシャンが集います。ジャズ、ロック、クラシック、ワールドミュージックとジャンルもさまざま。この地域資源を活かし、情報や施設、人材をネットワーク化し、音楽文化発信地としての大塚のまちをアピールできないかとの発想からスタートしたもので、単にライブハウスの連携だけでなく、周辺の商店街や公共施設も一体となり、地域住民・地域団体や企業、多くのミュージシャンの協力で運営されています。

すでにある地域資源に注目し実績を積む

隣接する池袋や巣鴨と比べると、話題性に欠けるくらいのある大塚のまち。実行委員会の事務局、城所信英さんは「ないものねだりではなく、あるものさがしをまちづくりのポリシーとしていきます。文化的要素は、人をつなげるもの、まちの絆として必要」と話します。音楽ソフトやプレーヤーなど音楽を聴く環境が変化し、音楽を聴くことが閉鎖化、個人化するなか、本来、時間と空間の



無料コンサート。大塚にはプロ・アマ合わせて2つのビッグバンドがある



南大塚地域文化創造館でのライブ

芸術である音楽は、連帯感を伴った人間的な文化であり、ゆるい空気が流れるヒューマンサイズのまち・大塚だからこそ、音楽は街角で輝いてあふれ出すかもしれない、と。

数日にわたって行われる音楽祭は、南大塚ホールをはじめ、天祖神社や地元企業のエントランスなど、まちの至るところで多様な音楽に触れられる「まちかどライブ」や、チケット（共通パスポート）を購入して複数の店で音楽を楽しむことができる「ミュージッククルーズ」など盛りだくさんの内容。実行委員会では、第1回の成功を受け、年々新しい企画を考案してさらなる発展を目指しています。「事業はスタートするまでが大変でしたが、実績を積んでいくと賛同者や協賛者が増えてきました」と城所さんが話すように、2012（平成24）年の第4回おおつか音楽祭では、都電荒川線の一車両を貸し切って行う「都電ライブ」を開催。乗客約30名を乗せ、午前11時30分に大塚駅を出発、三ノ輪橋駅で折り返し、再び大塚駅に戻る間、「さきこ・やぎりんバンド」と「タカノトモフミ」が演奏を披露。アルパという主に中南米で演奏される民族楽器のハープやキーボード等を車内に持ち込んでのライブは大好評でした。また、リニューアルオープンした南大塚地域文化創造館のオープン記念式典とともに、「おおつか音楽祭2012オープニングセレモニー」と、ファーストライブが行われました。

「おおつかオリジナル サウンドオブミュージックコンサート」など参加型の企画も登場するなど、盛り上がりを見せる「おおつか音楽祭」。参加店だけでなく多くの飲食店に人々が立ち寄り、商店街もまた音楽祭に合わせたセールを実施するなど、地域の活性化に一役買っています。

※「おおつか音楽祭」は平成22年度、「第6回東京商店街グランプリ」で準グランプリを受賞した。



商店街パレードとまちかどライブの様子

福祉と産業における文化活動の展開

文化は、高齢者や障害者、子ども、学生などが参加するためのきっかけとなり、立場の異なる人々がその活動を通して関係性をもち、相互理解を深めることが可能になります。文化が異なる政策分野と融合し、幅広い層の区民が文化とふれあう機会となっている事例を紹介します。

駒込・染井銀座商店街「ふれあいアートストリート」

福祉 + アートで特色ある商店街に

「ふれあいアートストリート」は、障害者アート作品を身近に感じてもらうと、染井銀座商店街振興組合と豊島区立駒込生活実習所・福祉作業所（以下、駒込施設）の協働により、2010（平成22）年に始まりました^{※1}。

地域住民の高齢化がすすみ、商店街を訪れる人の休憩所が必要だと考えていた染井銀座商店街振興組合の高埜秀典理事長が、駒込施設の齊藤一紀前施設長から、「障害者の絵画展示と、空き店舗

※1

この取り組みが評価され、平成23年度の第7回東京商店街グランプリで進ケラン店街グランプリを受賞した。

を活用した喫茶店の運営を考えている」と聞いたのが事業を立ち上げるきっかけになりました。

商店街の協力店舗の店先に障害者のアート作品を展示し、活動拠点として、空き店舗を利用したふれあいアートギャラリー「ベーカーリーカフェあうる」(※2)を開設しました。

アート作品の選定にあたっては、駒込施設の指定管理者である(社福)東京都知的障害者育成会や(財)日本チャリティ協会の協力のもと、都障害者総合美術展などの入賞作品、海外を含む障害者の絵画からピックアップ。展示は屋外のため複写を用いており、展示期間は約3カ月。店頭のイーゼル展示や、店外の壁を利用した展示を行っています。展示替えを行うごとにホームページに掲載、商店へのリピーターを増やす努力をしています。また、駒込施設内にある「ふれあいアートギャラリーこまごめ」や「ベーカーリーカフェあうる」では、原画を鑑賞することができます。

3年目の2012(平成24)年6月、「ふれあいアートストリート」では、一人の作品を1点ずつ展示するそれまでの手法から、一人の作家に焦点をあてることとし、青空個展「安田光一展」を企画。原画を含め、約40点を展示しました。安田氏は豊島区在住。駒込福祉作業所の利用者であり、「豊島区障害者美術展」等で多くの賞に選ばれた実績があります。色鮮やかで大胆かつ繊細な作品は、染井銀座商店街の街路灯を飾るシンボルフラッグのデザインに採用されているほか、名刺の台紙デザインに使用されています。続く7月から11月は、葛飾区在住の自閉症の画家・伊東誠さんの青空個展「MAKOTO」を開催しました。

「障害者アートには独特の魅力があります。一人でも多くの人に作品に接してほしい。そして、

※2

ベーカーリーカフェあうる

障害者の地域社会への参加や障害者理解の促進のため平成22年10月オープンした「ミニミニカフェ。焼き立てパンの販売、喫茶などが楽しめる。障害者が制作した雑貨や絵画のポストカードなども販売している。

営業時間：午前10時30分～

午後6時、水曜日休業

是非、原画も見に来てほしい」と話す齊藤前施設長。「こんな殺伐とした時代だから、やさしい気持ちになれることをしたかった。この商店街からふれあいの輪がひろがってくれたら嬉しい」という高埜理事長は、「商店街の人たちはみな商人（あきんど）です。商売に関係のないことにはできないだけ関わりたいくないというのが心情。ですから、まちおこしをする際、商店街の人たちの手を煩わせなくてもよい仕組みを考える必要があります。目先の商売だけでは、まちの将来の夢がなくなりません。そこで、文化の視点を加えようと思ったんです。この取り組みで、『ベーカリーカフェあうる』が人の集う場所になりましたし、商店街が協力的になりました。現在、『ベーカリーカフェあうる』を運営するボランティアに、約30人が登録しています。今後もさらに駒込をアートのまちとしていきたい」と語ります。

いま、障害者アート作品への関心が高まり、活動を推進する動きが全国的に注目されています^{※3}。「ふれあいアートストリート」の発展に期待が高まります。



※3
障害のある人たちの芸術活動を推進する動き
日本ではNPO法人エイブル・アートジャパンや、ポータル・アートミュージアムNO・MA（滋賀県近江八幡市）の活動、アーツ千代田3331（東京都千代田区）の「ポコラート全国公募展」など

（写真上）「ベーカリーカフェあうる」の店内
（写真下）ふれあいアートストリートを視察する高野之夫区長

一人ひとりが生きる可能性のある街

——それぞれの鼓動を聴く

アートディレクター 北川フラム

世界中の大都市はどこも同じようになってしまった。何時でも用途を変えられる超高層ビル、ブロック化した再開発。最新の情報を最大限に、最速でというウェブ社会の価値観が、人間の動きと、空間に貫徹している。一人ひとりの身体と五感は衰弱し、鈍くなった。私たちはマーケティングで計られる平均的人間、員数に成り果て、階層は分析化し、決して交わることのない世界の情報に翻弄され、それを消費して日々を送っている。競争と興奮、刺激、大量の消費はあるが、そこには冷たい、人間の無関心がある。

一人ひとりの本能は田舎を求めている。空間的な旅の向こうにある時間を遊行する旅を求めている。では、この都市は？

池袋は、ブレードランナーの世界になりつつある現代東京のなかで、まだ一人ひとりが生きる可能性がある街に私には感じられてきた。芝居や美術への関心はモノづくりの現場がもつエネルギーの存在を感じさせてくれる。

ヨーロッパ精神の華であるルネサンスは、研究する、協働する、工夫する素地をもった中世から生まれたと指摘した批評家がかつていたが、彼は日本、東京という幻想の共同体を想定したわけではなく、具体的な地域のなかで創り上げるアレヤコレヤから始めるしかない小さなサロンに拘った。

ノッペラとし、ただ効率的なだけを目指して、落ち転がり続ける地域の奇蹟のような東京にあって、地域ごとに特色をもって動いてきた豊島区の諸地域が、それぞれがもつ固有時の鼓動を丁寧に聴くことが大切だと思う。